育成會編輯部編

高等女學校
中學校
幼年學校

入學豫習作文

東京

育成會發行

1004

特19
195

學文
第架

育成會編輯部編

高等女學校
中學校
幼年學校

入學豫習作文

東京

育成會發行

明治
43. 3. 4
内務

凡例

一、本書は師範學校、中學校、高等女學校及び各種學校の入學準備を目的として編纂したるものなり。

一、本書收むる所の各題目は各學校に於ける最近の入學試驗問題を集めたるものなれば、之によりて學習せば最も便宜多きことと信ず。

一、本書中の日用文は、男女難易を取り交へたれば、學習者は其の目的に從ひ選擇學習するを便とす。

一、本書は各課の終りに類題を掲げたれば、學習者は之によりて自ら作文し、教師の訂正を受くるを可とす。

一、本書は近來の趨勢に鑑み、殊に趣味多き口語體寫生

文を加へたり。

一、本書は又獨學自習に便せんが爲め、各課の終りに字句の註釋幷に類語を加へたれば、學習者は之れによりて自修上の便を得べし。

一、本書と同一目的を以て編纂せしものに左の二書あり、是亦頗る學習の便あることを信ず。

○入學豫習算術　全一冊

○入學豫習讀本　全一冊

師範學校
中學校
高等女學校

入學豫習作文

目次

第一　日用文

一、中學校に入學の目的を問はれしに答ふる文……一
二、師範學校に入學の目的をとはれたるに答ふる文……三
三、女子師範學校に入學の目的を問はれたる返事……六
四、陸軍幼年學校に入學の目的を問はれたる返事……九
五、中學校入學の事を叔父に依つて父兄に請ふ文……一二
六、入學試驗の模樣を友人に知らする文……一五
七、遊學を奬められし返事……一八
八、廢學せんとする友を諫むる文……二一
九、友の病氣を見舞ひ梅の花を贈る文……二四
一〇、外國にある兄の許に家の狀況を報ずる文……二六
一一、勸儉尙武會を催す文……二九
一二、來客の忘物を翌日下女をして屆けしむるに添ふる文……三一

一三、在京の友人に苦學の方法を問ひ合する文……三三
一四、地方の中學より都會の中學に轉校せんとする可否を問ひ合されしに答ふる文……三七
一五、虚榮心に富める友人に忠告する文……三九
一六、友人の怠惰を戒むる文……四三
一七、病氣に臥床せる友を慰むる文……四六
一八、學校の選擇を在京の友に依頼する文……四九
一九、遠方にある叔父に學資の補助を乞ふ文……五一
二〇、入學試驗に關する學科程度及參考書を問ひ合する文……五四
二一、友人の卒業を祝する文……五六
二二、友人の遊學出途を送る文……五八
二三、同窓會を催す文……其一、……六一
二四、郊外散歩に友を誘ふ文……六五
二五、保證人の周旋を在京の友人に依頼する文……六八
二六、保證人を依頼する文……七〇
二七、在京の友人に書籍購入方を依頼する文……七三
二八、旅行先より弟におくる文……七五
二九、友を招ぐ文……七七

三〇、口語體を候文に改むる文例……其一、……其二、……七九

第二　普通文

一、東京……八二
二、今上天皇陛下の御聖德……八五
三、地球……八九
四、獅子……九一
五、宮城を拜し奉る……九三
六、田舍と都會……九六
七、電氣……九九
八、信用……一〇一
九、わが學校……一〇五
一〇、雪合戰……一〇七
一一、茶……一〇九
一二、象……一一一
一三、硝子……一一四
一四、忠義の犬……一一六
一五、一週間の日記……一一九

一六、衞生……一二二
一七、軍艦を觀る……一二四
一八、鐵道……一二八
一九、鐵……一三二
二〇、里の小川……一三四
二一、恩賜御衣の詩を敷衍せよ……一三六
二二、天……一三七
二三、養蠶……一四〇
二四、勇……一四三
二五、氷……一四五
二六、農業……一四七
二七、朋友……一五〇
二八、三月の雪……一五一
二九、梅……一五二
三〇、衣服……一五四
三一、口語體を普通文に改むる文例　其一、……其二、……一五六

第三　寫生文　口語體美文（叙情、寫生、叙事、）

一、渡……一五八
二、汀……一六一
三、釣魚……一六三
四、姉妹……一六六
五、月……一六八
六、海岸……一七一
七、下宿屋……一七四
八、春の日……一七六
九、夕暮……一七八
一〇、小川……一八〇
一一、林……一八二
一二、寺……一八七
一三、猫と小鳥……一九〇
一四、蛙……一九二
一五、級會……一九四
一六、徒步競爭……一九六
一七、修學旅行……一九八
一八、公園……二〇〇

一九、日の出前……二〇三
二〇、わが村……二〇四
二一、試驗場……二〇五
二二、春……二〇七
二三、瓜盜人……二一〇
二四、活動寫眞……二一六
二五、病……二一八
二六、雨……二二〇
二七、發火演習……二二二
二八、敎場……二二六
二九、朝……二二八
三〇、野球……二三〇

（終）

師範學校
中學校
高等女學校

入學豫習作文

育成會編輯部編

○中學校に入學の目的を問はれしに答ふる文

櫻花やうやう色めき初め候ところ、愈御壯健無事御消光あそばされ候よし欣喜の至りに存じ候。扨小生の前途に對しては、毎々御配慮に預り、御友情の程忘れがたく候。御下問の中學校入學の目的は、御存知の通、目下の學制は、中學を卒業するにあらざれば、如何なる專門學校へも、入學の資格を與へ

られず候故、小生も只、單に小學校を卒業したるが爲に順序として、中學へ進まんと思ひ候までに、外ならず候。されば、何故に中學校に入學せしやとの、御下問に對しては、普通學の智識を完全にして、他日專門の學府に入るの素地を得んがためなりと御答申すまでにて候。先は右御返事まで、かくの如くに御座候。草々頓首。

註釋・▽壯健(身體が丈夫なる事)　▽消光(日を暮す事)　▽欣喜(よろこぶ事)　▽前途(行く先のこと)　▽配慮(心配する事)　▽友情(友だちのなさけ)　▽御下問(御問ひ合せと云ふ事

▽學制(學校の制度)　▽學府(學校に同じ)

類題　幼年學校に入學の目的を問はれたるに答ふる文

類題・感銘の至りに存じ候(わすれられぬこと)

○師範學校に入學の目的を問はれしに答ふる文

復啓、爾來貴兄には御健全にて御勉學の趣、慶賀至極に候。次に小生無事に農耕に從事致し居り候間、憚ながら御安心なし下され度候。さて小生事這般、師範學校に入學志望の事御耳に達し、何等の目的に出でしかとの御下問、從來軍人となつて君國に盡さんとのみ申しをり候事とて、奇怪に思召候も

御尤と存じ候。小生も今日迄農業の手傳を致し、餘暇を以て某先生の塾に入り、漢、英、數の三科を研修いたしをり候ひしが、某先生の御意見には、軍國多事の際こそ軍人となり、國家に盡すも可ならむ。今日は太平を謳歌する時に候へば、寧ろ教育界に身を投じて、國民教育に從事し、富國强兵の根本的素成分の完製を期するこそ、策の得たるものなれと申され候が、小生も大に感悟し、實にさる事と存じ候。よつて飜然、軍人とならずして教育家となり、國家に盡さばやと思ひたち申し候。國民教育の振不振は、實に其の國の盛衰に關することに候間、重大なる責任を有する事業に候へば、偉大なる人格を有せざれば、其の責を全くすること能はざるは、いふまでもなき事に候。よつて師範學校に入學して、各講師の薫陶を蒙り、たとひ、偉大なる人格を有するものになり得ずとも、せめては缺點少き人格を有し度と存じ、師範學校に入學の手續に及びたるものに候。御下問に對し、愚意を述ぶるところ、かくのごとくに候。何卒貴兄にも此の小生の執る方針につき御意見も候はゞ御高教仰ぎ度存じ候敬具。

註釋　▽這般(此度に同じ)　▽奇怪(あやしむ)　▽謳歌(よろこび歌ふ)　▽根本的素成分(最も、もとたるべきもの)　▽盛衰(盛になり又衰ふる事)　▽事業(しごと)　▽講師(先生)　▽薫陶(をしへ)　▽人格(人がら)　▽愚意(自分の意見)　▽飜然(ひるがへる)

類題　▽商業學校に入學の目的を問はれたる返事

類語　▽次代國民(少年を云ふ。又少國民)　▽凡骨を脱す(怜悧になる事)

○女子師範學校入學の目的を問はれたる返事

拙き筆もて、御文の御返事いたし候、無禮御恕しくだされ度候。妾事この度師範學校入學の準備いたしをり候事の御耳に入り、種々御訓誨に預り、幾重

にもありがたく御禮申し上げまゐらせ候。妾事家督を相續すべき身の上にて、父も母もいたく年老い候事とて、何故さることを思ひ立ちしかとの、御訝みもことわりに候。されど妾には、少々考ふる所御座候まゝ、教育者とならばやと思ひたちたるものに候。妾方先祖は、武士の片端に候へば、若し男子ならんには軍人にも仕立、家業を繼がせ度など、兩親ども申しぐらしをり候。されど男子とては一人もなく、女子も妹と妾とたゞ二人に候へば、兩親の心を慰むるよしなく、男子と生れざりしことのみ、

口惜しと存じ居り候。されば、せめて看護婦にもならば、從軍も叶ふべけれど、これとて太平の世には用なければ、寧ろ教育界に身を入れ、良妻賢母を養成して、あはれ幾多の軍人を生ませたらんには、軍人となりて君に仕へ奉り、國に報ずると其の效果の餘り異るまじと存じ、且つ兩親の意志を滿たすことにもなるべければ、決然思ひ定めたる譯に候。實は、御心配に預り候家督相續の事も候間、兩親にもよく意中打ちあけ候處、痛く喜ばれ、直ちに贊成許可を得候間、家督の儀は其の時の都合にまかす

積りに候。先づは御返事まで。かしく。

註釋 ▽訓誨(教へる) ▽家督相續(自分の家をつぐこと) ▽訝しみ(あやしみ) ▽片端(かたはし) ▽意中(心のうち)

類題 ▽小學卒業後の方針を友に問はれし返事

類語 ▽教の庭(學校のこと)

○陸軍幼年學校に入學の目的を問はれたる返事

復啓、梅花馥郁のをりから御勉學の趣、有爲なる青年の前途に横はるものはそは何に、快哉言ふばかりも候はず。次に小生も魯鈍ながら、自から打鞭を加へつゝ勉學罷在候間、御安心なしくだされ度候。

さて御下問の、陸軍幼年學校入學の事は、小生小兒以來變更せざる宿望にて候、彼の日露戰爭當時の如きも、年齡の長ぜざるをば殘念にのみ思ひ居り候ひしが、今や年齡も幼年學校入學はなし得らるることゝなり候へば、いかでか寸時の猶豫もおかるべき。直ちに父兄と談合、此の擧に出でたるものに候。小生は單に世より崇拜せらるゝ理想的人物とならんとのみ心懸居り候。日本の國土に生れたる男子は、宜しく大君に身を捧げ、國家の爲めに盡すは、誰彼の區別あるものに候はず。されば本居宣長翁の、しきしまの大和心を人とはゞ、朝日に匂ふ山櫻花と、詠ぜられたる、精神をもつて精神となし、一旦ことあれば、義勇奉公、櫻の高潔なるが如くに、雄々しく振舞ひ、散るべき折には潔く散る心懸を持ち居り候。要するに立派なる日本人として、立派なる軍人となり、立派なる國民となりおほせたしとの外に候はず。若し小生の軍人としての短所も御認め候はゞ、御訓戒をねがひ上げ候、まづは御回答まで。　匆々不悉。

註釋　▽梅花馥郁（梅の花の香ふ事）　▽愚鈍（おろかなる事）

▽打鞭(鞭にて打つ事、又、鞭撻)　▽宿望(以前からの志)　▽年齡(歳)　▽猶豫(のばすこと)　▽寸時(僅かの時間)　▽振舞(おこなひ)　▽短所(缺點)　▽訓戒(いましめ)　▽不悉(まだ言ひつくせぬ)　▽崇拜(あがめ尊ぶこと)　▽高潔(いさぎよい)

類題　幼年學校へ入學の可否を問はれたる返事

類語

○中學校入學の事を叔父に依つて父兄に請ふ文

謹啓、頃日の寒氣は身も切るばかりに候が、叔父上様の御身には御障も候はぬか、御伺ひ申し度候。こと に叔母上様の御持病は如何と、痛く心配いたしをり候。御様子御聞かせくだされ度候。次に小生方父上を初め一同無事に候間、御安心なし下され度候。さて小生事、本年三月は高等小學校卒業の事と相成り居り候。元來父祖以來の農家に候間、こゝを期として農業に從事せよとの、父母の意見兄の意見に候。山間の僻村なれども、「人並の教育を受けさせたるものなりとは、父上初め一同の考には候はねど、」時勢は日に進み、月に歩みて、又是しきの教育にては、社會に立たんこと思うても、實に危き事と存じ候。農業に從事するとしてすら、猶かくの如くに候。然るに小生は次男の事とて、獨立するに非ら

ざれば他姓を續ぐべきものに候へば、尚一段の教育も要することゝ存じ候。されば是非共中學校に入學し、せめて中等教育丈も受け度ものと存じ候て、此の儀は嘗て何囘か、父及び兄に向つて懇願致し候ひしも、何時も不得要領にのみ終り候。熟々考へ候に、到底小生一人にて申出で候も、希望を果し得まじと存じ候間、是非共叔父上様の御加勢願はずばならぬ事と相成り候。ついては御多忙中甚だ御迷惑の儀に候へ共、右小生の希望御叶へくだされ候て、御力添へなしくださる様御盡力の程幾重にも御願ひ申し上げ候。先は御願まで草々拜具。

註釋　▽山間の僻村（山の中の淋しい村）　▽時世（世の中）　△懇願（たのむ）　▽不得要領（わからぬ事）

類題　▽女學校入學の事を友によりて父に請ふ文。

類語　▽父兄の意見（父母の意見、兄の意見）

○入學試驗の模樣を友人に知らする文

拜啓、過日は推參仕いろいろ御馳走に預り、當時の愉快今に忘れがたく候。小生儀豫定の通り十五日に上京、十六十七兩日の試驗に應じ候ひしが、前日は學科の試驗にて、英語數學はかねて難儀のもの

と思ひ構へたることとて、先づ易き方に思ひなされ申し候。然るに國語幷びに歴史地理は、甘心するまでやり果せたりとも思はれず候、さりながら、大體の上より總合して考へ候時は、先づ十中の八九までは、合格者の仲間入をなし得らるべくと存じ候。翌日の口述試驗は、たゞ其の場の頓智を合せたるのみに候。體格は、御承知の山間の出生にて、山川跋渉の逞しき荒くれ男に候へば、是れのみは實に自慢のものに候ひし。先づ試驗のすべては餘り困難とは思はれ申さず候。さりながら入學志願者の

數は、定員の四五倍に達しをり候事とて、必ず入學合格者の中に入られ得るや否は期しがたく候。何れ今日は叔父の許を訪づれ、明日村田君を訪ひ、二十日歸京いたす豫定に候間、其節は珍らしき都話を齎らし御勉學の御邪魔に罷出づべく候。先は取敢へず受驗の模樣御報知まで。草々

註釋　▽懇談(ねんごろなる談話)　▽豫定(前以て定めて置く事)　▽甘心(滿足する事)　▽頓智(突差に考へ付きたる智惠)　▽山間の出生(山の中にて產れたる事)　▽山川跋渉(山となく川となく、足に任せて歩く事)　▽訪づる　▽齎らす

類題　△學校の狀況を田舍の父兄に報ずる文

類語

○遊學を勸められし返事

御惠書何やらんと、取急ぎ拜讀いたし候處、貴兄には、御健全にて御勉學の趣、何よりの慶事に候。かつて在鄕御在校中は、靑柳先生より神童とまで御稱讃を受けられたる貴兄には、今や東都の秀才中に一頭地をぬき、常に優等の御成績にて何時もクラスの牛耳を執らるゝ由、田舍住居の身は聞き及び候つゝ、羨望に堪へず候。小生も亦無事に修學、本年

は學校も卒業し得らるべくと存じ候。ついては、如何にもして遊學いたし度と、父兄には幾度か意中を漏し候も、何時も行惱みの姿にて、立消えとなり來り申し候。然るに貴兄には、魯鈍なる小生をも御見捨てなく、出京遊學せよとの御示敎、且つ萬般の御心添、御懇篤なる御心中感泣に堪へず候。實は數日前、又候叔父を賴み申しいで候處、込み入りたる家事上の都合有之、密々兄とも談合中に候。されど大體は出京と內定の運びまで立ちいたりをり候間、遠からず確定いたすべく存じ候。然る上は、適當

の學校御指示に預り度候。たゞこゝに事の延引勝に相成候は、御承知の通り田舍にては、田舍氣質とか申して、兎角學生の墮落につき老父母の心配致し候。さりながら貴兄よりの御狀に接し、若し貴兄と同宿なし得らるれば、心落ち居るなど申しをり候間、なほ一回愚父に對し、安心の出來うる樣、御手紙ねがひ度候。されば小生は直ちに入學試驗の準備に取りかゝり候間、萬事いやが上にも御心添へくださるやう偏に願ひ上げ候。先づは取り敢へず御回答まで不具。

註釋　▽神童(怜悧なる兒童)　▽秀才(かしこき人)　▽牛耳を執る(最もすぐれたること)　▽羨望(うらやましき事)　▽意中(心の中に思へる事)　▽行き惱み(むづかしき事)　▽感泣(うれしきと云ふ意)　▽田舍氣質(田舍特有の氣風)　▽回答(返事)　▽賞讃(ほめらるゝ)　▽魯鈍(ばかもの)　▽墮落(身を持くづす)

類題　▽東京見物に招かれし返事

類語　▽才子(かしこき人)　▽寤寐之を思ふ(寢て居る間にも常に忘れざる事　▽御芳翰(お手紙)

○廢學せんとする友を諫む

君近ごろ、廢學思ひ立たれ候樣承り候は、事實に御座候か。かくては、九仞の功を一簣に缺くものに候

はずや。さりながら、止むを得ざる事情と申す事も、往々これあるものに候へば、其の理由こそ承りたく存じ候へ。君が中途退校を思ひ立たれ候は、如何なる御事情に候か。御兩親の許可なきためか。或は病氣其他多大の事故のため、學業にたへ給はぬために候か。先きに、御兩親樣の遊學御許しなされ候事は、僕承知致し居候が、今更、さる筋なき事を仰せらるゝ筈あるべくも候はず。又君の身體の强健なる事も、また學資以外多大の事故の生ぜざることも。僕もとより承知致し居候へば、よもこれ等の理

由にはこれあるまじく存じ候。故郷の慕はれ、父母の戀しさに、膝下の孝養を缺くが遺憾と申され候ならば、至情の然らしむる所、誠に褒むべき樣には御座候へども、苦學多年、天晴名譽の月桂冠を戴きて、故郷に歸り、父母の名を發揚するに比すれば、暫時膝下の孝養を缺くも、むしろ恕すべきことには候はずや。まして今廢學歸郷せられ候はば、郷人の笑草となりて却て御兩親の不面目いかばかりかと存じ候。この邊の道理よく〳〵御考へなされ、必ず思ひ止まりて、御奮勉相成りたく候。友情に驅ら

れ直言極諫致し、失禮の言思はず迸り候は、平に御宥恕くだされたく候。

註釋　▽廢學(學校を退くこと)　▽九仞の功を一簣に缺く(僅かの所で成功せぬ事)　▽事故(差支へ)　▽遊學(學問をする爲に他所に行く事)　▽學資(學問に要する金錢)　▽膝下(膝もと)　▽遺憾(ざんねん)　▽發揚(あらはす)　▽宥恕(ゆるす)▽直言極諫(目の前でいさめること)　▽月桂冠(ほまれ)

類題　▽學友の怠情を諫むる文

類語

○友の病氣見舞に梅の花を贈る文

やう〳〵春も色めき出で候ところ、御許樣には御風邪にて、御籠りあそばされ候よし、小妹より承り、よそながら懸念いたし居り候。就ては今日午後より、御見舞かた〴〵參上の豫定に候ひしが、俄かに來客これあり、差支へ候ため、此の狀認め申し候。平素は殊のほか御丈夫の御身なれば、日ならず御快癒の御事とは存じ候へども、御油斷なく御攝養あそばされたく候。さて兼て御約束の紅梅、この節やう〳〵咲き揃ひ候間、此の狀に添へて、御覽に入れまゐらせ候。これを私とも御みなしの上、御枕邊ち

かく置かせられ候はゞ、いくらか御心を慰め申すべく候。まづは御見舞まで。いづれ二三日中には、かならず御伺ひ致したく存じ居り候。かしこ。

註釋　▽小妹（自分の妹を謙遜して云ふ）　▽懸念（心配すること）　▽豫定（前以て定めること）　▽來客（客が來ること）　▽此の狀（この手紙）　▽平素（ふだん）　▽快癒（病氣がなほる事）　▽攝養（氣をつけて大事にすること）　▽枕邊

類題　▽病氣全快を友に報ずる文

類語　▽全快（快癒に同じ）

○外國にある兄の許に家の狀況を報ずる文

拜啓。元日に御執筆なされ候御手紙は、非常に遲延いたし、兩三日前に到着いたし候。六十日もかゝりし事は未曾有のことゝ存じ候。船の都合あしかりしなるべしと、父上の仰せられ候。偖御障りもなく御勉學のよし。嬉しく存じ上げ候。父上も母上も、日毎夜毎に御噂いたし居り候。昨年の暮に、家屋の造作をなほし候。例の門より入りて左に當る六疊の處を、壁を拂ひて緣側を設け候ため、日當りも宜しくなり候。なほ兄上樣御愛玩の松柏、雪子の身長と共に、ます〳〵大きくなりて、只今はかり候ところ、

三尺六七寸もこれあり候。雪子も來月にて、學齡に達すべく候間、來四月には就學いたす筈に御座候。父上は例の通り、謠曲と盆栽とに日を送り居られ候。母上は小生と雪子との洗濯物に、追はるやうなりと毎々こぼし居られ候。小生はさほどには無く候へども、雪子はなか〳〵お轉婆なれば、著物など、も直に汚す故にて候。先は近況御報知申し上げ候。草々頓首。

註釋　▽執筆(書くこと)　▽遲延(おそくなる事)　▽未曾有(今までにない)　▽愛玩(かあいがる事)　▽學齡(必ず學校に行くべき年齡)　▽元日(一月一日)　▽謠曲(うたい)　▽盆栽(はちうゑ)

類題　▽外國在住の叔父に近況を問はれし返事。

類語　▽在住(住んで居る)　▽近況(近頃の容子)

◎勤儉尚武會を催す文

拜啓。益御健全にて御研學のよし賀し奉り候。さて小生事熟ら當世の學生の狀態を見候に、憤慨に堪へぬ事のみに候。今や全く邊幅を飾ることをのみ事として、朴訥なる學風を見出し兼候はゝ、誠に遺憾の極みに存じ居り候。就ては有志の學友相計りて、勤儉尚武會を開き、一方には擊劍、柔道、體操の敎

師を聘して身體を錬へ、一方には疎衣粗食に甘んずる習慣を養成し、以て學生界の惰弱を救ひ、延いては社會の奢侈をも正したくと存じ候。併しこは意志の强固なるものならでは、素志の貫徹おぼつかなしと存じ候間、貴兄には本會の中堅となりて、會員の鞭撻に任ぜられたく、發起者一同の御願ひ申す處に御座候。いづれ近日中參上いたし、具體的に御相談いたし度存じ居り候。まづは取りあえず御報知旁々御ねがひまで、かくの如くに御座候。草々頓首。

註釋　▽健全(丈夫)　▽研學(學問を研究すること)　▽當世(今の世)　▽狀態(ありさま)　▽憤慨(いきどほること)　▽邊幅(身のまわり)　▽朴訥(質素)　▽疎衣粗食(みすぼらしき衣服、まづい食料)　▽惰弱(よわきこと)　▽意志(こゝろざし)　▽貫徹(つらぬき、とほる事)　▽中堅(心棒)　▽鞭撻(せめむちうつ)

類題　▽同郷出身者の學友會を催す文。

類語　▽同郷出身(同じ村から出た人)

○來客の忘物を下女をして屆けしむる時に添ふる文

昨日はわざ〳〵御いでくだされ、誠にうれしく存

じ上げまゐらせ候。御目に掛り候はゞ、申し上げたしと思ひ居り候こと、いとさはに候ひしが、只うれしさに胸さわぎて、何を申し上げしやら、後になりて思ひ出で候へば、何ひとつ、まとまりたる御話も致さゞりしやうにて、殘念に存じ居り候。御歸りの折は、只別るゝ事の悲しさに、御忘物の御注意もいたさず、誠にお耻しき極みに御座候ひし。さて御歸りの後、座敷を取り片附け候ところ、御許樣御持參のハンカチーフの見え候まゝ、早速御とゞけいたし度存じ候ひしが、あやにく下女不在のため、遲延いたし申譯これなく候。只今この狀に添へて、御送り申し上げ候間、御納受くだされたく候。なほなほ御暇を候はゞ、昨日に御懲なく、御いでくだされたく願ひ上げ候。いづれ私事もその内に御伺ひいたすべく候。かしこ

註釋　▽さは(澤山)　▽納受(受取ること)　▽御懲なく

類題　▽友を招ぐ文

類語　▽招待(人をよんで馳走などをする事)

○在京の友人に苦學の方法を問合する文

拜啓、さて錦地は目下梅花盛に咲き匂ひ候趣、新聞

紙上にて見受け申し候。定めて貴兄にも、例の散歩を試みらるゝことゝ存じ候。當地は。寒氣强き土地とて、僅に二三輪笑を漏しはじめたるに過ぎず候。承れば貴兄は、御持論の獨立自活主義をば御實行、のかたはら御勉學なされ、今や特待生てふ名譽を荷はせられ候よし、梅花の香くわしき櫻花の高潔なるにも比すべく、實に欽仰の至りに堪へず候。小生事、山間の僻地に生れ候上に、家も貧しく、僅かに高等小學卒業といふまでに過ぎず候。されどたゞ此のまゝにて、猪を追ひ、猿に立ち交じりなんには、事足り申すべく候も。苟も人と生れ、男子の性を稟けながら、かく山間に燻らんは、いかにも腑甲斐なきやうに思はれ、口惜しき極みに候間。假令、車夫なれ、新聞、牛乳の配達なれ、何なり彼なり、如何なる賤業難業も厭ひ申すまじく候間、貴兄の取らるゝ苦學の方法、何卒御示敎に預り度候。若し幸にして兄の膝下におかれ、御指導に預りなば、御名譽のかくばかりには立ち比ぶべくは非ずとも、もの眞似はなし得らるべくと自信いたし居り候間、御手足纏とは存じ候も、同鄕の好を以て、驥尾に附する榮を

賜はらば、實に生涯の恩人に候。何卒御多忙中の貴重なる時間御割愛、御回答偏に祈り上げ候。時候もいまだ寒氣のをりとて、十分御身御大切に御勉學遊ばされたく候、草々頓首。

註釋　▽錦地(御地、貴地等に同じ)　▽笑を漏し初む(咲き初めたる事)　▽持論(自分の信ずるところ)　▽獨立生活主義(他人の世話にならざる主義)　▽欽仰(うらやみあほく)　▽高潔(いさぎよき事)　▽驥尾に附す(御後につきて行く、と云ふ意にて、謙遜して云ふ辭なり)　▽割愛(ほしいものをわける)

類題　▽在京の友に出京後の便宜を賴む文。

類語　▽かばかり(かくばかり。そのやう)

○地方の中學校より都會の中學校に轉校せんとする可否を問合されしに答ふる文

復啓、餘寒未だ相去らず候處、益々御健全にて靜かなる田舍にて心の限り讀書に耽けらせ候よし、雜踏の東京にある身は、實に羨望に堪へず候。次に小生事身體は非常に達者に候間、此の點については御安心なし下され度候。たゞ充分の勉學のならぬは、一つの憾みとする所に候。さて御下問の、東京の中學校に御轉校の件は大に贊成いたし候。そは學校の位置設備は、確に田舍の方立ち勝り居り候へ

共、教師は東京の方立ち勝り居り候。ことに語學の教師は、しかく考へられ候。數年間の高等學校入學試驗の成績に徵しても明に候。されば二三年級までは、田舍の中學校にて修學は最も適當と存じ候。されど四年五年の高級に及び候ては、高等學校入學試驗の準備として上京の上學習するが、最も策の得たるものと信じ候。よつて決然御上京、某中學校の補缺に應ぜらるゝ樣御勸め申し上候。たとへ一年間なり先だつて上京罷在候へば、細かき當地の事情にも通じをり候間、小生の力の及ばん限り、御助力申し上ぐべく候間、御上京の節は見苦しくは候へ共、小生の下宿に御出でくだされ度待ちをり申し候。入學試驗に要する參考書は、大概は所有いたし居り候間、別に書籍の御携帶にも及ぶまじく候。先づは愚意申し上げ度御回答まで。拜具。

註釋　▽雜踏(賑やかなること)　▽羨望(うらやむ)　▽設備(まうけ)　▽補缺(不足を補ふ)　▽携帶(持つ事)

類題　▽中學校の狀況を父兄に問はれたる返事

類語

○虛榮心に富める友人に忠告する文

拜啓、暫く御面晤を得ず打ち過ぐし候は、實に遺憾の極みに候。貴女樣にはこの寒さにも御負け候はで、學びの道に分け入らせ候趣、何よりの御事に候。妾また無事に何のあらはれたることも候はで、徒らに月日を過ぐし居り候間、憚りながら御許しくだされ度候。さて、吉田樣事昨日御見えに相成り候間、かねてより少々心にかゝり居り候事候間、それとなく貴女樣の御樣子承り候ところ、案に違はず、例の御勝氣と御才氣とは、目下の御境遇心に落ち居させ給はぬと見え、高等女學校を退かれたまひ、

女子大學の方に御進みの御心中、結構のことのやうに候ものゝ、なほ御一考の餘地は候かと存じ候。高等女學校一年生として、稀有の御文才を有し、都下女子文壇に花を咲かせ候事だに候を、猶ほ飽かせ給はで、學校を變更遊ばさるとは、餘りに進み過ぐるにはあらざるやに考へられ候。妾共の考にては、かくまでに文壇に持囃され、かくまでに友人に羨まれ、かくまで各教師より目をつけられ候に、かかる御擧動に出づるは、徒らに虚榮心にかられて、可惜（あたら）この修養時期を御動きは、時間に於ても非常

なる不經濟と存ぜられ候。よつて此處は、じつと御觀念あつて高等女學校御卒業の上、更に御進みあるこそ肝要と存じ候。妾不肖の身をもて賢しだちて御忠告申すなどは、あるべからざる事に候はんも、曲げて愚言御納れくだされ候はば、實に喜ばしき極みに候。何卒無禮の罪は友情より出で候ものと思召し、幾重にも御ゆるしくだされ度候。かしこ。

註釋　▽案に違はず（思つた通り）　▽才氣（かしこき氣質）　▽境遇（地位）　▽稀有（めづらしきこと）　▽肝要（必要なこと）

類題　出京を止むる文

類語

○友人の怠惰を戒むる文

拜啓、小生臥蓐中は度々御見舞に預り、ありがたく御禮申し上げ候。兄には、例によつて御健全のよし、實にかく病魔に苦しめられ候身は、羨しさに堪へず候。小生學校缺席中は、兄も定めて御出席御勉學の事とのみ思ひ居り候處、昨日は小生三月ぶりの出席、無論御面晤の得らるゝ事と樂みをり候處、友人の言によれば、兄にはこの一ケ月有餘は、出缺常ならず、學力も痛く劣り、人格もまた從前の兄にはあらざるよし、段々承れば花柳界に足を入れたる

のみならず、彌々深入して、莫大の借財をさへなし、御兩親樣も甚大なる御心痛とのよし、兄の所行の淺ましさ、御兩親樣の御氣毒さ、誠に驚嘆の次第に候。今や教師の信用いたく落ち、尙ほ此の上に御改悛なきに於ては、退校處分に及ばれんとのよしに承り候。かくては兄の生涯は、光明なきものとなり果て、御兩親樣の御生涯は御不幸と定り申し候。三寸の舌頭に、男子を飜弄する賤業婦の恐る可きもの位の事は、萬々御承知ある筈に候を、嗚呼實に殘念の極みに候。何卒今日以後は飜然志を改め、從前の御身持に立ち歸らせ、御兩親樣をも御安心遊ばさせ、御名譽の御恢復偏に願ひ上げ候。言或は過激に渡り御立腹もあらんかとは存じ候も、友情の致す所と御海容願ひ上げ候。先は友情聞きすてがたさに御忠告申し上げ候。

註釋　▽臥蓐中（ねて居る）　▽出缺常（出席缺席定まらぬ）　▽飜然（ひるがへる）　▽花柳界（茶屋などの如きもの）　▽莫大（多きこと）　▽借財（借金のこと）　▽所行（常の行ひ）　▽改悛（あらためる）　▽飜弄（もてあそぶ）　▽過激（はげし過ぎる）

類題　▽故郷なる弟の許へ書籍に添へて送る文

類語

○病氣にて臥床せる友人を慰むる文

拜啓、引續き御見舞も致さで打ち過ぐし候罪、御恕しくだされ度候。本日中途御親父樣に御目にかゝり候間、貴兄の御病狀御伺ひ申し候所、二三日來頓に御快方に赴かれ候よし、小生も大に嬉しく、至急御目にかゝり、親しく御物語をも致し度と存じ候所、折惡しく親戚に取込事有之候ひし爲め、其の儀もならず殘念に候。依つて先づ御伺ひ致すまでの愚意を休め度と存じ、一書を差上候次第に候。貴兄も長らく御臥床の事とて、定めて御心の急かれ候

事と御心中御察し申上げ候。才子多病とか申し候間、秀才の御身また免る可からざる事かと存ぜられ候。要するに、御才に任せて餘り御活動の過度なるより、御身體をも損ぬる樣の事に立ち至るかと存じ候。よつて病勢の衰へたるを機とし、十分に御心の落ち居る樣にせでは、折角の御輕快もまた重ることにも相成り候間、學校の方など全く念頭に措かず、身體復舊を須つて御勉强致さるゝ樣なさるべく候。貴兄の秀才を以てせば、二三ヶ月の御缺席御休學は凡生の日々孜々たるも及ぶべきもの

に無之候、其の點は御安心なさるべく候。この一册は小生の親戚なる田島秋村氏の著にかゝるものにて、社會の反面を上手に寫し、滑稽の間に世を諷したるものに候へば、御病床の御慰みには、應はしきものと存じ、御送附申し上げ候間御覽くだされ度候。小生事亦其の中に推參いたし、種々御慰め申上べく候。先づは意中を申上げ度寸紙差し上げ候、

草々。

註釋　▽臥床(寢て居る事)　▽過度(すぎること)　▽念頭(思ふこと)　▽恢復(もとにかへる)　▽孜々(たゆまずつとむ)

類題　▽母の病氣を見舞ふ文。

類語

○學校の選擇を在京の友人に依賴する文

拜啓、時下嚴寒の候に候處、貴兄には益御健全にて御勉學のよし、御令弟より承り候。多年螢雪の御修行、錦衣御歸鄉も間近きよし賀し奉り候。次に小生事亦健全にて通學いたし居り候間、憚ながら御安神なしくだされ度候。さて小生も本年三月には高等小學校卒業の事と相成り居り候。ついては、中學校は東京にて卒業致し度と存じをり候。然るに、東

京には公私學校の多數これあり候爲め、何れの學校が宜しきにや、其の目的によつて系統もあるべくと存じ候。よつて御選擇を御願ひ申す譯に候。小生の志望とする所は、醫學に候へ共、帝國大學醫科入學は、費用の點より到底不可能に候間、醫學專門學校に入學致す積りに候。されば其の準備としていづれの中學校に入學致し候はゞ、其の目的に適合いたし候か。御高敎願ひ度候。なほ御選定くだされ候、學校の規則書、一葉幷びに費用の概算、是非共御送附なしくだされ度候。先づは御依賴までかく

の如くに御座候。草々。

註釋　▽嚴寒（きびしき寒氣）　▽螢雪（學問を勉强する事）　▽不可能（出來ない事）　▽概算（おほよそ、數へること）

類題　▽在京の友に買物を依賴する文。

類語

○遠方にある叔父に學費の補助を乞ふ文

拜啓、今年は、近年稀なる寒氣にて堪へかね申し候。御錦地は如何に候や。叔父上樣には、其後御障りも候はで、例の御事業御經營被遊居候や、御伺ひ申し上げ候。降つて私儀無事に通學罷在候間、憚ながら

御安神なしくだされ度候。さて昨年御歸國の際、一寸御話申し上げ置き候通り、此の三月には小學校卒業の事と相成り申し候に就ては、御膝下に參り、工業學校を卒業いたし、その御地にて御經營の補助に御使用御願ひ申したしとは存じ居り候へ共、先生の御意見によれば、素地なき學習は効果如何はしく候へば、せめて中等教育丈も受けたる上にての方、然るべくと申し居り候。よつて小生も中學校に入學致し度と存じ候。されど英語は御地にても必要の由に候へば、田舍の中學校にては餘り面

白からずと存じ候。ついては東京にて修學致す積りに候。よつて學資の事共、父上に向つて御願ひいたし候所、月額十二圓よりは支出し能ばずと申し居り候。併し是非共十七圓なくてはならぬよし、在京友人の申され候。さりとて尙此の上に支給を父に乞ふも、五ヶ年間は不可能の事と存じ候。五圓の爲に此の意志の貫徹し得ざるも殘念に候間、右五圓だけ中學卒業迄、御補助の儀御聞き入れくだされ度。折入つて御願ひ申し上げ候。成功の上は必ず御報恩申し上ぐべき覺悟に候へば。何卒叔母上樣

にも、義雄樣にも御相談御願ひ申上げ候。頓首。

註釋　▽經營（いとなむこと）　▽效果（きゝめ）　▽支出（だすこと）　▽貫徹（つらぬきとほす）　▽報恩（恩がへし）

類題　▽母に代りて外國なる父の許へ、送金の受領を報ずる文

類語

○入學試驗に關する學科程度及び參考書を問合する文

拜啓、冬期休業御歸省の際は甚だ失禮致し候。其の後は御健全にて御勉學のよし、賀し奉り候。次に小生事も無事にて通學罷在候間、憚ながら御安心なしくだされ度候。さて小生事本年三月小學校を卒業致し候間、御地の中學校に入學致し度存じ候。兼て聞き及び候所によれば、府立中學校は何れも志望者多數にて、地方學校の出身者は中々及び難き由。ついては其の試驗問題とても地方よりは難儀のものと存ぜられ候間、程度幷にこの一二年間の問題及參考書は何々にてよろしきか。御多忙中甚だ恐れ入り候へ共、御報知願ひ上げ候。尙私立にては何れの學校が宜しきか、併て御報知くだされ度候。先づは御依賴まで、草々拜具。

註釋　▽歸省(自分の家に歸ること)　▽志望者(こゝろざす人の事)　▽難儀(むづかしき事)　▽多忙(いそがしき事)

類題　▽實業學校入學試驗の程度を問合す文

類語

○友人の卒業を祝する文

拜啓、櫻花咲き匂ひ、野邊には芹摘み土筆拔きなど見ゆる折柄、聞き及ぶことの嬉しきは、貴兄小學校御卒業の事に候。ことに優等の御成績のよし、御名譽の事に存じ候。御兩親樣始め御姉上樣の御喜びは如何ばかりかと、御推察申し上げ候。これもつまり平生の御勉强と天禀の優秀なるとが、この御結果を來せしものと存じ候。有爲の青年の御行末は、頼もしく候。しかしこの御卒業は先づ一小段落のつきたるまでにて、中等教育に向はんとする門戸に過ぎずと存じ候間、なほ〳〵御奮勉の上、此度の御名譽を、中等教育高等教育にも一貫して變らざる御覺悟願ひ上げ候。始めあつて終りある事は至極困難のよしに候間、御卒業を祝すると同時に、御記憶に存ぜられん事を偏に願ひ上げ候。先は御祝詞申し上げ度かくの如くに候。草々。

註釋　▽推察(おしはかる)　▽天稟(うまれつき)　▽有爲(將來に望のある事)　▽門戸(かどぐち)　▽記憶(覺えて居る事)

類題　▽友人の病氣全快を祝する文。

類語

○友人の遊學出途を送る文

拜啓、さて昨日は御出でくだされ候よし、折惡しく他出中にて御面晤を得ず殘念に候。兄御出途の當日は御見立て申すべきの所、恰も小生試驗の當日の事とて、動すれば御面會を得難きかと存ぜられ候間略儀ながら拙書を以つて御別れ申し上げ候。

兄今回の御出京は、兄に取つては生涯の幸不幸の分岐點にして、又本村榮辱の係る所に候へば、非常なる御決心を要する儀に候。當今先輩書生の墮落は、後進學生遊學の道を閉ちつゝある姿に候うて既に本村にても貧笈の志を懷く者無きはあらねども、父兄に危惧の念を懷かしめたる爲め、何れも其の許可を得ざるは憤慨に堪へざる次第に候。兄には强いて御親父樣の御許諾を得て、蹶然御出京の事故、無論此の邊についての御覺悟を有せらるる事と存じ候へ共、御願ひ申し置き候。來年には小

生も出京致し度、既に父にも意中を漏らしおき候間、出京の上は互に本村後進の模範ともならばやと、今より思ひをり候。兄の學力天才は御成効の程疑ひ無之候。たゞ御身體大切に御勉學なしくださるやう吳々も申し上げ置き候。草々。

註釋 ▽他出(よそへ行く) ▽面語(逢つて話をする事) △生涯(生きて居る間) ▽分岐點(別れる處) ▽負笈(學問をするために故郷を出立すること) 危惧(あやぶみ恐れる事) ▽許諾(ゆるし) ▽蹶然(思ひ切りて) ▽模範(てほん)

類題 ▽轉學せんとする友に送る文。

類語 ▽轉學(別の學校に移る事)

○同窓會を催す文　其一

拜啓、三月分袂以來、御面會の期もなく、打ち過ぐし候月日、約一年に相成り申し候、承り候へば、兄には中學にて御勉學のよし、小學時代の秀才は、今日また中學の秀才と存じ候。然るに昔日駑なる小生は又今日中學の駑に候儀、心耻しき次第に候。しかしかつて鬼事に竹馬に駈競など、いたし候をりの事思ひ出で候時は、其の時の事ども偲ばれ申し候。よつて近傍に住居いたしをり候同窓者と談合いたし同窓會を開きたらんには、嘸かし懷舊の情を慰

すべく、又、今日の變化を語り得べく、此上なき愉快ならんと、思ひ寄り候ては寸時も延引なりがたく、直ちにと存じそれ〴〵葉書を出し置き候。尙、當日會則等其他につき、兄と御相談の上原案提出いたし度と存じ候間、是非共御賛成なしくだされ、明日午前十時までに母校まで御光來ねがひ度候。まづは御勸誘まで草々。

註釋 ▽分袂(わかれる事) ▽談合(相談) ▽懷舊の情(昔を思ふ心) ▽母校(わが出身の學校) ▽駑(にぶきこと)。

類題 ▽同級會を催す文。

類語

○同窓會を催す文　其二

拜啓、卒業分袂以來、御面晤の期もなく、打ち過ぐし候月日は早や一年有餘と相成り申し候。其後中學校にて御勉學のよし、小學校時代の秀才は、定めて又中學時代の秀才たるべくと存じ候。されば、如何ばかりの才氣を走らせ候か。御現況御聞き申し度候。小生も中學には居り候も、昔日の駑馬は猶今日の駑馬に御座候て、心恥しく候。されど小學校時代の無意義なる遊戯、無意義なる惡戯は、今に其頃の偲ばれ申し候。若し當時の卒業生一同、一堂に會し、

昔日を語り今を語らば、如何に愉快に候はんかと存じ候。かく思ひ及び候ては寸時も延引は心憂く候間、最寄の者を訪づれ、右同窓會を起し度旨申入れ候所、何れも賛成せられ候。然るに兄は同郷にて在りながらも、割合に遠隔の地に御住居の事とて、頓に御面晤もならねば、手紙を以つて御相談申す譯に候。兄には無論御賛成くださることゝ存じ候間、御意中を伺はで會員と見做し申し候。されど一同集會前に於て、一度兄の御足勞を煩し、會則の起草其他準備につき、御相談申し度候間、御多忙中

れ入り候へ共、明後十九日午後一時母校へ御光來なしくだされ度候。不具。

註釋 ▽才氣(かしこき氣質) ▽現況(いまの有樣) ▽無意義(つまらぬと云ふ意) ▽一堂(一つの座敷) ▽最寄の者(近所の人) ▽遠隔(とほき事) ▽起草(下書を作る)

類題 ▽同郷出身者の會を催す文。

類語

○郊外散歩に友を誘ふ文

拜啓、梅は咲き匂ひ、鶯は囀り、小川の根芹の萠え出で候など、すべて春の氣色となり、風もやゝ溫み、今

の今まで冬籠りせる人を、そゝのかして呼び起す陽氣と相成候。昨日近郊よりまゐり候者の便りに。雲雀の空に囀り、麥畑の青く萠え出で候は、實に見物の由に候。かゝるをりにたゞ引き籠りて、書物にのみ眼をさらし候も、身體の爲めならず、且つ天帝の惠まれしこの好期を、空くするやうに思はれ申し候間、郊外一日の散歩は、時に取つて必ずあるべき事かと存ぜられ候。今日同窓の小川君に出會ひ候所、却つて先方より右散歩を誘はれ候は、同じくこの陽春に誘はれたるものと、思はず互に會心微

笑を漏らし候。よつて卽時、兩三名に宛て檄を飛ばし、明日は近郊一日の散歩を試み、歸途言問の團子に腹ふくらせ度と存じ候へば、贊成あれかしと勸誘いたし申し候。何れも不贊成はあるまじと存じ候。よつて貴兄にも萬障を排し、一日の清遊に勉學の腦を休め、更に元氣恢復の上、御勉學なさるべく右御勸誘申し上げ候。尤も發起者には少々考案も候間、贊否は直に御返事ねがひ度待ち居り申し候。

草々

註釋　▽近郊（近き野邊）　▽會心（心と心と互によく合ふ事）

▽檄を飛ばす（手紙を出す）　▽萬障（すべての差支）　▽清遊（清さわそび）　▽恢復（なほす）　▽歸途（かへりみち）　▽排（しりぞける）

類題　▽梅見に友を誘ふ文。

類語　▽寒梅（冬咲の梅）　▽二月寒（二月頃の寒氣）

○保證人の周旋を在京の友人に依賴する文

拜啓、かねて御心配相かけ候入學試驗の結果は、上首尾にて入學許可の通知只今有之候。實に研學の糸口、立身の門戸開けたる樣に感ぜられ、將來に向つて一光明を認め、申し候。試驗準備につき御心添へくだされ候御骨折を、空にせざりしは、何より嬉しく、實に胸中の快いふばかりも候はず。兄の御膝下に於いて、御薫陶に預ることを得るは、此上なき幸福にぞんじ候。何れ上京の上は御面會いたし萬々御禮申し上ぐべく候。御厄介の上に、尚且つ御厄介相懸け候は甚だ恐れ入り候へども、御承知の通り不案内にて、東京には兄の外知人も親戚も無之候へば、何人に保證人を御賴み致候て宜しきか、一向相分からず、困じ果て候間、尚一層の御奔走を煩はし、適當の保證人を御依賴くだされ度、幾重にも御願ひ申し上げ候。小生上京拜眉の折は、十五六日

頃と思ひ居り候間、御實家に何ぞ御用も候はゞ、御遠慮なく仰せつけくだされ度候。まづは御依賴まで、かくのごとくに御座候。拜具。

註釋　▽上首尾（都合のよいこと）　▽研學（學問を研究する事）　▽光明（ひかり）　▽御奔走（御ほねをり）　▽拜眉（お目にかゝる）

類題　▽先輩の現住所を故郷の友に問合する文

類語　研究の端緒（學問の糸口）

○保證人を依賴する文

拜啓、過日上京の節は種々御厄介に相成り、ありがたく御禮申し上げ候。其節御依賴の件々、御下命のまゝに、それ〴〵處分濟と相成り候間、御安心下さるべく候。さて歸鄉以來、試驗の結果は如何になりしかと、日々待ち暮しをり候が、昨日入學許可の趣、通知これあり候。是にて年來の宿志を達し得らるべくと、空想を逞しう致し、快いふばかりも候はず。是れも偏に御庇蔭の致す所と、感泣いたし居り候。先づ是にて勉學の端緒を得候儀、御喜びくだされ度候。就いては、市内にて相當の身分あるものにあらざれば、保證人の資格なしとの事に候間。御厄介の上に、御厄介をかくる次第、甚だ恐縮の至りに候

へ共、是非共正保證人と御成りくださる事、御承諾なしくだされ度、折入つて御願ひ申し候。老父より も、御願ひ申し出つるなと申し候へ共、老眼の書面認めも取り急がれ申さず候間、貴殿に宜しく申し上ぐるやうとの事に候。あしからず御宥しくだされ度候。まづは御依賴まで、不具。

註釋 ▽處分濟(しまつをする) ▽御下命(御命令) ▽年來の宿志(以前からの志) ▽御庇蔭(おかげ) ▽空想(そらだのみ)

類題 ▽在京の叔母の許へ寄宿を依賴する文

類語 處置致し候(處分濟)整理(しまつをつける)

○在京の友人に書籍購入方を依賴する文

拜啓、告別以來、已に四個月を相成申し候。此の間度度御見舞狀に預り、ありがたく拜謝いたし候。爾來、病魔も醫師の藥と滋養物とにて、頻りに攻め付け候ためか、大に快方に赴き候。此の分にては遠からず出京、又候御高說も承りうべくと、をり〳〵心に笑を漏らしをり候。かつて兒と、議論に花を咲かせ候英文法の問題は、かかる折に研究するこそ、實によき事なれと思ひつき候。よつて直ちに當市の書肆を、彼是探し廻らせ候へども、一も手に入り申さ

ず、殆んど困じ果て申し候。ついては御地より取りよする外にみちなく候。されど彼是の選擇は、書面にては要領を得ず、至急の間にはあふまじくと存じ候間、學期試驗前の御多忙中、兄に申出づるも心なき事のやうには存じ候も、他に依頼する人とてもなければ、是非共御隙をうかゞひ、彼の問題研究に適當と覺ぼしきもの、御買取の上小包郵便にて御送附くだされ度、金參圓爲替にて封入いたしおき候間、よろしく願ひ上げ候。何れ全快上京のをりは、未發の研究の結果を齎らし、御耳を驚かし申すべく候。先は御依頼まで。敬具。

註釋　▽告別(わかれる事)　▽病魔(病氣)　▽書肆(本屋)　▽選擇(えらぶ)

類題　▽遠地の友に反物購入方を依頼する文

類語　▽名産(名高き産物)

○旅行先より弟におくる文

拜啓、さて父上様及び母上様には、御風邪の氣味も候はぬか。留守中定めて拔りもあるまじくとは存じ候も、この兄に代り充分の孝養ある樣願ひ上候。旅行とは申せ、昔の五十三驛時代とは事變り、一瞬

千里の汽車旅行故、風雨寒暑の患ひもなく、至極安全のものに候。さりながら一方よりは何となく見落したる所もありし樣に思はれ、事足らぬ點も聊か有之候、汽車の窓より見渡せば、山を遶へ川に別れて、都會と見る間もなく打過ぐる狀は、恰も活動寫眞を見る心地いたし候。東京に入りては、田舍とは趣を異にして人の往復の狀も、何となく心せはしく、隨つて生活の狀態などもさこそと思ひやられ申し候。先づ九段の靖國神社に詣で、忠君愛國の士の忠魂義魄を吊らひ候處、たゞ何となく涙のみ

溢れ申し候。それより上野淺草を見物いたし、こゝ二三日滯在所用を果し、更に京都に出向く豫定に候。巨細は旅行日記として小包郵便に差送り申し候間、御覽くだされ度候。何れ來月始には歸國と相成るべく候間、其節は日記漏の事共物語り申すべく候。雨につけ風につけ內外充分に注意を怠らぬ樣願ひ上げ候草々。

類題　▽父の旅行先へ母に代りて家の狀況を報ずる文

類語　▽瞬間（しゅんかん）（まばたきするま）

○友を招く文

うす墨の走り書き、まことに無禮には候へど、思ひ立ちては堪へ難く候へば、急ぎて申し上げまゐらせ候。明後日は日曜に候へば、是非御あそびに御いでくだされ度候。電車の終點よりは、程遠くも候はず。その上、櫻花見事に咲き亂れ居り候て、心なき風の二片三片吹き散らすも、風情ある今日此頃の我が家に御座候をや。御馳走は多からねど、心を籠めて御許樣御嗜好の御すもじにても參らすべし。御返事には及び候はず。かならず御いでくだされたく、もし御母上樣も御一緒ならば、なほ嬉しかるべ

しと、母よりも申し出で候。まづは御招ぎまで、餘は御めもじの上、よろづ聞え上ぐべく候。かしこ。

註釋　▽終點（終る所）　▽風情（おもむき）　▽嗜好（このむこと）

▽御目もじ（御目にかゝること）

類題　▽花見に友を誘ふ文　▽歌留多會に友を招ぐ文、

類語

○口語體を候文に改むる例

其一

父上樣には、だん〳〵御病氣もおなほりなされて、近いうちにお歸りあそばすとのこと、みんなた

いきう喜んで居ります。仰のことは、日々よく心がけて居ります。どうぞ御安心くださいませ。一日も早くお歸りあそばして、いろ〳〵めづらしいお話をしてくださるのを、お待ち申して居ります。

○

父上様には、漸う御いたつきも御快癒あそばされ、近々に御歸宅なさるべきよし承り、皆々此上なう喜び居り申し候。仰の御事は、日々よく心がけ、皆皆相つとめ居り候間、何卒御安心くだされたく候。なほ〳〵一日も早う御歸宅の上、種々珍しき御話承りたく、御待ち受けまうし居り候かしく。

其二

伯母様の御庭の梅も、もう綺麗に咲き揃つたでございませう。學校の下しらべや、家の仕事などが、なか〳〵忙しいので、つい御無沙汰を致して居ります。でも今度やう〳〵の事で、學校は卒業いたしましたから、どうぞ御安心くださいませ。

○

御伯母上様御庭の梅も、はや匂ひこぼれ、咲き綻び候ことゝ存じ上げまゐらせ候。私こと毎日學校

の下しらべ、又は家事の手傳など、なか〳〵に忙しく候ため、存じながら御無沙汰いたし居り候。されど今度やう〳〵、卒業いたし候間、何卒御安心くだされ度候。先は御知らせまで、あら〳〵かしこ

○東京

東京は、わが國の帝都にして、又世界有數の大都會なり。昔、室町時代に、江戸氏と云へる豪族の一門、此處に城廓を構へ、次で鎌倉時代には太田氏居住の地となりて。關東八州の重鎭たり。德川氏天下を一統するに及びては、此處に幕府を開きたるを以て、

次第に繁華を來し、明治の御代に、至りて遂に聖駕を駐め、畏くも宮城を此の地に定めさせ給ふに至る迄、前後八百年の星霜を經たり。されば名所舊蹟等も亦頗る多し。

まづ地勢を見るに、此處は武藏國の南方に展開し、東西四里南北三里。南方は東京灣に臨み、東西北の三面は、宏漠たる平原に境せり。武藏野すなはち是なり。人口大約二百萬、文明の利器悉く備り、官廳會社等公私の建築壯宏を極め、人道車道の往來織るが如し。

學校は東京帝國大學を始め、各種私立大學、專門學校、中學校、女學校、師範學校其他各種實業學校及小學校等其數殆んど算し難く、なほ日に進み、月に增加しつゝあり。誠に膨張的日本帝國の帝都たるに反かず。これ我が東京の概觀なり。

註釋　▽豪族(勢力のある人の一族)　▽重鎭(おもい場所)　▽聖駕(天皇陛下の御乘物)　▽星霜(月日)　▽展開(開くこと)　▽宏漠(廣きこと)　▽建築(たてもの)　▽壯宏(立派なる事)　▽膨張的日本(進步發達しつゝある日本)　▽概觀(大凡見たところ)

類題　▽大阪、　▽京都、　▽神戸、　▽横濱、

類語　駐在(とゞまりあること)

○今上天皇陛下の御聖德

恐れおほきことなれど、今上天皇陛下の治め給ふ明治の大御代は、四方の海よくをさまりて、吹く風枝を鳴らさず。教化はいかなる深山の奥、海邊のはてまでもゆきわたりて、五千萬の蒼生ことごとく惠みの露にうるほへり。

陛下は御年十六にて御位に卽き給ひしが、內外多事の幕末の世にしあれば、御心づかひも一方ならざりしと承りしが、つひに維新の大業をとげ給ひ、一國統治の實を擧げさせ給へり。陛下が孝敬の御

心厚くおはしますは、宮中に歴代の皇靈を祀り、しば〳〵伊勢神宮、歴代の山陵に幸し給ふにてもしるく、仁愛の志深くおはしますは、あまねく地方に行幸せさせ給ひて、民の辛苦を問ひ、忠臣、烈士、孝子、義僕を表彰し給ふにても明なるべし。然してその御儉德は、宮中の御費用を節して、軍國の費用救恤の事業にあてさせ給ふにても知らるべし。かつて宮城火災ありて、赤阪の離宮に避けさせ給ひし御とき、朕が居室のため、民を煩はすなかれと諭し出し給ひしが如きは、かの高津の宮の御盛德も思ひ

出されて、ありがたきこと極みなし。

陛下は、親ら大元帥として陸海軍を統率せさせ給ひ、二十七八年戰役には、大本營を廣島にすすめ給ひ、三十七八年の戰役には、御精勵の度、日清役にも越えさせ給へりしと承る。陛下は、朝早くより夜の更くるまで、政務を執らせ給ひ、世人の、避暑よ避寒よとさわぐ日も、一日だにやすませ給はず。日曜日にさへ出御ましまして、すべての機務を見そなはし給ひ、その御暇には、親しく史書を御覽ぜられ、御心をこめて治亂のあとを尋ね給ふとかや。かゝ

るかしこき聖天子を戴けるわれ等は、日夜勅語の御趣旨を奉戴して、力を國家に致し、義勇公に奉じて、陛下の御思召にそひ奉らんことを期せざるべからず。

註釋 ▽四方の海(四方の海よく治まるとは、國内のよく治る事にて、あながち海と云ふ意にあらず) ▽吹く風枝を鳴さず(風も靜に吹いて樹の枝に當つても大なる音を出さない程、世の中の靜なる事) ▽敎化(をしへ) ▽蒼生(人民) ▽惠の露(天皇陛下の御惠) ▽内外多事(わが國内の事、又、外國との關係上、種々事件の多き事) ▽幕末(德川幕府の倒るゝ頃) ▽歷代の皇靈(代々の天皇陛下の御靈魂) ▽山陵(天皇の御墓所) ▽機務(肝要なるつとめ) ▽御儉德(御儉約をなさるゝ御德) ▽救恤(すくひ惠む事) ▽高津の宮(仁德天皇の御事)

類題 ▽國母陛下の御盛德

類語 ▽太平の御代(よく治れる御代) ▽鼓腹(食物を澤山食ひ、腹鼓を打つ事にて、太平に馴れたる樣を云ふ) ▽濱の眞砂の盡きせぬ御代(海濱に澤山ある小石の數へ盡す事能はざる如く、よく治りて長へに盡くる事なき御代)

○地球

我等が、祖先以來居住しつゝある地球は、其の形圓球の如くにして、南北の兩極に於て、稍扁平狀をなせるものなり。周圍一萬二百餘里、直徑三千二百五

十里ばかりの物なり。昔時人文の未だ開けざりし世には、單に天に境せる平面體とのみ信ぜられたりしが、科學の發達に伴ひ、遊星中の一にして、球狀をなせるものと斷定せらるゝに至りぬ。蓋地球は幾億年前にありては、一の瓦斯體なりしが、次第に冷却して液體となり、更に固體となり、遂に人類其他の動植物等の生出を見るに至りしものなりとか。造化の妙技眞に計り知るべからず。

註釋　▽祖先(先祖なり)　▽居住(住んで居ること)　▽形狀(かたち)　▽圓球(まるき球)　▽扁平狀(ひらたき形)　▽人文(人の智惠)　▽科學(學問)　▽斷定(きめること)　▽冷却(つめたくなること)▽造化(天然自然と云ふこと)▽妙技(上手なる技術)

類題　▽月、▽金星　▽世界

類語　森羅萬象(いろ〳〵のもの)

○獅子

獅子は、古來獸類の王と稱せられ、熱帶地方に產する猛獸なり。その大なるものは、身長七尺に及び、容貌はなはだ逞しく、頭わりあひに大きくして、胸張り、腹細し。殊に牡には鬣ありて、見るからに精悍の風丰を備へたり。常に岩窟又は草叢などの間にす

み、夜出でて食を求む。食は野獸家畜の差別なく、近づき來るを見れば、たちまち飛びかゝりて之を捕ふれども、極めて餓えたるとき、若しくは攻擊を受けたる時などにあらざれば、みだりに人に害を加ふることなし。其の性怜悧なれば、人の恐るべきを知れるなり。なほ獅子は多く夜吼ゆる習慣あり。その響、雷の如く、萬獸これを聞きて、皆おそれ伏すといふ。

註釋　▽熱帶地方(あらびや、あふりか、いんど等の熱い國)　▽容貌(顏かたち)　△精悍(强い)　△風丰(姿)　▽攻擊(せめる)

類題　▽虎、▽熊、▽海馬、▽鰐魚

類語　▽寒帶地方(寒き國)　▽深林(奥深い木立の中)　▽獰猛(力の强い事)　▽溫順(おとなしい)　▽野蠻人(開けない國の土人)　▽嘯く(吠える事)

○宮城を拜し奉る

今上陛下のおはしまして、萬機を總攬し給ふ千代田の宮は、帝都の中央にありて、四周には清淨なる濠を繞らし、外廓に數多の門ありて、南に向へるを櫻田門といふ。門を入りて東北行すれば、やがて二重橋のたもとに立つべし。これぞ宮居の正門にし

て橋は二重に架けわたされ、ひろき一帶の芝生には、若々しき常磐木まばらに生ひ立ちて、君が千とせの春をことほぐ。こゝに楠公の銅像建立せられ、遙に皇宮を拜して、長へに鎭護なし奉る。二重橋より一直線に東に亘れる道路は、日露戰役の紀念として、新しく作られたる所謂凱旋道路にて、もと馬場先門のありしところなり。馬場先門の北に和田倉門あり。二重橋の正門に幷びて、右なる坂下門内には宮内省あり、百官有司の出入嚴かなり。石垣高く聳え、老松深く繁茂し、碧の甍ほのかに拜まるゝ

は、わが大君の宮居なるべし。九重の上みどりの雲深うして、草莽の民のうかがひ奉るべくもあらねば、拜し奉る御垣の外のありさまをかき記し、せめて御代をことほぎ奉るなり。

註釋 ▽萬機(すべての政治上のこと)▽總攬(すべての機務を扱ふこと) 鎭護(しづまりまもること) ▽紀念(しるし、かたみ、又、記念) ▽碧の甍(みどりの瓦のこと) ▽百官有司(官吏) ▽草莽の臣(下々のものと云ふ意)

類題 皇居遙拜の記

類語 御湟のさゝなみ鷗の夢を破らず、築土の松風千代の樂をかなづ。

○田舍と都會

世人多くは、田舍を去つて都會に住むを此の上なき名譽と思ふもの多かり。されど、われはその理由を、發見するに苦しむるものなり。便不便の上より見んか。げに都會は便利なり。電信や、郵便や、電話や、其の送達迅速なれば、瞬くひまに數十里の外と通信するを得べし。汽車、電車、自働車もありて、運輸交通の便備らざるはなく。官廳も、會社も、銀行も、學校も、病院も、劇場も、公園も、新聞社もあり。百般の商店ことごとく集り、實用・娯樂一として備はらざるはなし。これ都會の特長なり。さて田舍の勝れたる點は如何。春の日心のどかに野邊の細道分け行かば、藁屋の苔むしたるに、新柳の髪を梳るあり。垣根の花は人を招き、道の邊の若草は人を迎ふ。小川は清淨なる水を送り、朝風は新鮮なる空氣を齎らす。これ田舍の春の光景ならずや。都會は驕奢なり、華美なり、誘惑の機關多し。田舍は質朴なり、悠長なり、詩的趣味多し。肉的生活を欲するものは都會に集まり、靈的生活を求むるものは、田舍に去ると、いひけむ、西人の言、まことに味深し。要するに、都會と田舍

とは特長を異にするのみにして、決して上下の階級を示すものにあらず。都會人勝れて、田舍漢劣るの理如何であるべき。人は如何にもあれ、われは田舍を欲するなり。

註釋 ▽理由(わけ) ▽發見(見出す) ▽迅速(はやし) ▽通信(報知すること) ▽運輸交通(物を運搬する) ▽劇場(芝居) ▽新柳(若葉が萠え初めたる柳) ▽新鮮(新しき事) ▽光景(ありさま) ▽驕奢華美(驕りて花やかなる事) ▽誘惑機關(遊び所、遊ぶ道具) ▽質朴悠長(質素で氣長なる事) ▽詩的趣味(歌や詩などに現はれたる如き趣味) ▽肉的生活(只目で見、耳で聞くが如く、肉體だけ娛む樣な生活) ▽靈的生活(精神を娛ましむる樣な生活) ▽階級(へだて) ▽梳る(くしけづる)

類題 ▽田舍、▽都會、▽田園生活、

類語 ▽田園(田舍に同じ) ▽心的生活(靈的生活)

○電氣

猫の脊を、暗所にて逆に撫れば閃光を發し、玻璃封蠟の棒を、毛皮にて摩擦すれば、火花を放つこと又同じ。夏日一團の黑雲天を蔽へば、雷神威を震うて乾坤ために碎け、やゝもすれは、木を裂き、家を燒き、人畜を害すもの果して何の現象なるか。則ちこれ等の現象作用を稱して電氣とはいふなり。電氣に

陰陽の二性あり。陰の電氣は陽の電氣を引き、陽の電氣は陰の電氣を引く、その時閃光を放ち、音響を發するなり。この作用、空氣の上方に起るとき、その閃光を電といひ、その音響を雷といふ。其の相引くに當りては、恐るべき勢を以て狂奔し、相合ひて平均すれば、こゝに生命を失ひて作用全く止む。猛虎巨象の如き動物も、よく飼育すれば、驅使の用とすべく、電氣の如きも、その性質を研究して、これを馴らすときは、諸種の事業に用ひ得べく、或は數千里の道路を、瞬間に走る電車ともなり、或は數百里外

の人と、自由に談話をなし得べき電話ともなり、その他、電燈、電信、及諸種機械の動力として使用するを得べし。これその性質を熟知して、巧みに利用せしが爲に他ならず。世の諺に、馬鹿と鋏とは、使ひやうにて切れると云ふ事あり。卑近なる辭なれど、深く味へば、意味する處遠大にして、人智の行く所極り無きを謂へるなるべし。

註釋　▽閃光(光りぎらめく)　▽摩擦(こする事)　▽一團の黑雲(一かたまりの黑き雲)　▽乾坤(天地)　▽現象(ありさま)　▽音響(ひびき)　▽狂奔(くるひまわる)　▽猛虎(强き虎)　▽巨象

（大なる象）▽瞬間（目たゝく間）▽熟知（よく知る事）▽卑近（手ちかなること）▽人智（人の智惠）▽鋏（はさみ）

類題　▽電話、▽電信、▽電燈、▽電車、▽無線電信

類語

○信用

人の世に立つ上において、最も必要なるものは何ぞと問はば、まづ信用の二字を以てこれに答へむ。信用とは、任する事の出來ることなり。大丈夫なることなり。如何に金錢を貯ふることも、如何に學識高くとも、其の人にして信用なくば、到底其の人は成功すること難かるべし。古より大事業をなし、大成功をなしたる偉人傑者の傳記を見るに、一人として信用なかりしものなし。今の世の人、才識の卓絶せるもの少からず、金錢を貯ふるもの亦乏しからず。然れども衆人より信用せらるゝ人に至りては、まことに寥々として、指を屈する程だにあらざるべし。されば、何れの方面にても、信用ある人物を求めんとして、苦心せるは聞けども、未だ才識ある者、金錢あるものを求めんとして、苦心せるものあるは聞かざるなり。然るに世の人、職業難を歎き、處

世難を憂ふるものあり。何ぞ思はざるの甚しき。われ等今より勉學の傍、心して信用ある人物ならざるべからず。

註釋　▽學識(學問や見識)　▽到底(とても)　▽偉人(えらき人)　▽傑者(すぐれたる人)　▽卓絶(すぐれたる事)　▽職業難(職業を求めても仲々見當らぬ事)　▽處世難(生活して行く事のむづかしい事)

類題　▽人の職分、　▽日々の務、

類語　▽優勝劣敗(勝れたる者は勝ち、劣りたる者は敗ける)　▽處世(世わたり、又、渡世、生活)　▽信用は人に要求すべきものにあらず、神がよく職分を盡す人に賜ふ勳章なり。

○わが學校　遠く後に某山を控へ、近く前に某川を望み、春は霞を欺く櫻を見、秋は花よりも赤き楓葉を觀る。此の高燥閑雅の地に在るはわが某學校とす。市街を離れたれば、庭園も廣く從つて空氣も清淨なり。學を修め、膽を練らんには、此の校を措きて何れにか求むべき。現今生徒の數は六百に近く、教師の數は二十人に餘れり。建築は二階建なる所と、平屋造なる所とあり。二階建は普通教室にして、平屋立は特別教室なり。其の他御眞影奉藏室、講堂、理化室、書籍室、

教員室、寄宿舍等の設あり。教室は多く南向にして、校庭に面せり。運動場は五千坪ありて、木馬鐵棒等の用具備らずといふことなし。われ等、日々此の校に登り、善友良師に導かる。何の幸福かこれに過ぐべき。豈勉めずして可ならんや。

類釋 ▽高燥閑雅(土地が高く、靜かなること) ▽清淨(清いこと、又、清潔) ▽建築(家の建て方) ▽善友良師(學問品行共に善良な友人及先生)

類題 ▽わが家、▽わが好む山、▽わが村

類語 ▽三層樓(三階建) ▽白堊(白壁) ▽丘上(小高き所) ▽母校(わが學校) ▽櫻樹松間に點々す(櫻の木が松林の間に所

所に生へて居る)

○雪合戰

天の色次第に灰色となり、風もまた身にしむやうなりしかば、必ず雪ふるべしと思へりしが、果せるかな、夜の明くると共に、空一面にふりいだし、見るが中に五六寸積りたり。今日は午後雪合戰を行ふとの掲示出づるや、吾等は異口同音に萬歳を唱へ、悅び勇んで校庭に走り出でぬ。二人の體操の先生は、東西の軍の司令官ともいふべく、他の先生は參謀官、校長は參謀長ともいふべからんか。吾等は戰

闘員とならずして、衞生隊員となれり。やがて喇叭たる喇叭の音と共に、東西の兩軍鬨の聲を擧げて攻め寄せたり。雪彈は空に飛びかひ、兩軍入り亂れて、暫しは勝敗も分かざりしが、東軍は終に敗走したりき。われ等は衞生隊のことなれば、雪軍中の手凍え、體疲れて、落伍せる戰闘員を助けて、或は湯を飲ませ、或は火に暖めなどして、任務を盡しぬ。時に休戰の號音山野に響きわたり、兩軍は一齊に萬歳を三呼して解散したり。

註釋　▽掲示(高き所に掲げて人々に示す文書)　▽異口同音(多くの人が一諸に云ふ)　▽校庭(學校の庭)　▽戰闘員(戰をする人)　▽衞生隊員(戰闘員の負傷又は疲勞せる者を看護する人々)　▽敗走(負けて逃る事)　▽落伍(隊から放れる事)　▽任務(つとめ、又、職分、職務)　▽喇喨(ほがらかなる音)鬨(とき)

類題　▽土器制、　▽發火演習。　▽運動會

類語　▽非戰闘員(戰を直接にしない人)　▽追擊(敗走する敵を、後より追ふ事)　▽休戰(しばらく戰を中止する事)　▽包圍(四方から敵を取圍む事、又、包圍攻擊)　▽突喊　▽哨兵(もの見の兵)

○茶

我が國にては、優等の茶多く産するを以て、年々外國に輸出すること實におびたゞしく、外國貿易品

中、極めて重要の位置を占め、大に我が國の利益となるものなり。其の産地の最も名高きは、山城の宇治、武藏の狹山、駿河の阿部等にして、臺灣にも亦多く産す。其の他いづこの地にても多少産せざる地なし。茶の製法は、まづ四五月の頃、新芽を摘み取り、蒸籠に入れて蒸し、これを取り出して、冷したる後焙爐の中に投入し、爐上に置き、手にてもみながら靜に乾すなり。かくて製し上げたる茶を、急須に入れて煎じ飲むを煎茶といひ、挽きて粉末とせるものを抹茶といひ、粗製せるものを番茶といふ。いづれも一種の香味を有し、適度に飲用すれば、精神を爽快にし、惰氣をさますの効あるものなり。

註釋　▽優等（すぐれたる事）　▽重要（大切なる事）　▽粉末（こな）　▽粗製（よく製せざるもの）　▽香味（かうばしい味）　▽爽快（心よくする）　▽惰氣（なまける心）　▽急須（どびん）

類題　▽煙草、　▽砂糖、　▽酒、　▽珈琲

類語　▽精選（多くの中より、勝れたる物を選び出す）　▽輸出（外國へ賣出す事）　▽輸入（外國から我國に仕入をする事）

○象

象は陸上の動物中、最大なるものにして、體軀肥大、

其の高さ丈餘に及ぶものあり。形貌、頭太く耳長く目細く。また頸短きため、地上のものを飲食し、又は左右を顧ること難し。されど、鼻長くして、卷舒自在なれば、飲食物其の他の用を辨ずること恰も人の手の如し。牙亦長大にして、七尺より九尺に至る。性甚だ怜悧にして、柔順なれば、野生のものといへども、一たび捕へて飼養すれば、女子小兒の命にも違背することなし。世界における象の産地は、印度及び亞非利加の南方なり。好んで森林中に群棲し、一群數十百頭に上るものありといふ。群毎に必ず王

ありて、衆象を指揮命令し、毫もこれに違ふを許さずとぞ。印度地方にては、象を飼養して、或は騎乘に用ひ、或は耕耘に驅使すること、なほ吾人の馬を使用するが如しといふ。

註釋　▽體軀(身體)　▽肥大(肥滿して大きい事)　▽卷舒自在(卷のばす事の自由なること)　▽違背(そむく事)　▽群棲(二匹以上の者が一所にすむ事)　▽衆象(多くの象)　▽驅使(使用する事、おひまわし使ふこと)

類題　▽牛、　▽馬、　▽駱駝、

類語　▽草食(草を食料にする事)　▽肉食(鳥獸の肉を食料にする事)　▽孤棲(ひとりで巣の中に入つて居る事)　▽撫育(愛

しつゝ育てる事、又、撫養、愛育等）

○硝子

硝子は、玻璃ビイドロ又はギヤマンともいひ、硅石といふ鑛物と、石灰と、炭酸曹達とを、主なる原料として造り、又鉛其の他の物を交へ、諸種の色を施すことあり。罎類其他の色硝子などすなはちこれなり、世に、硝子の屑、罎の破壞物など買ひ集むるは、更に之を溶解して、再び完全なる硝子となすことを得ればなり。製造法は、まづ原料を調合し、搗き碎きて細粉とし、竈に入れて熱すること十五六時間、か

くて悉く鎔解して、恰も水飴の如き半液體となるべし。之を種と稱す。職工はこの種き鐵管の一端に附け、他端より吹き、洋燈の火屋、其他の種々の罎類をも造る。火屋、罎の如きは價の廉なるものなれど、燈臺用のレンズの如きは、一個にても幾萬圓に上るものありといふ。硝子は窓、障子等に用ひ明りをとり、又ランプ及び電燈の火屋に用ひて光を放たしめ、或は戸棚及び箱の戸などに用ひて、中にあるものを外より見るの便ならしむるのみならず、鏡、眼鏡、顯微鏡をはじめ、其の他すべての器械に

用ひて、その用途甚だ廣きものなり、もしこの世界より、一切の硝子を取り去りたらんには、文明の進歩は忽ち頓挫して、再び立つこと能はざるに至るべし。

註釋　▽原料(もとの材料)▽溶解(とける、又とかす)▽用途(用ふる所)▽頓挫(中途でくぢける)

類題　▽紙、▽筆、▽陶器、▽煉瓦。

類語　▽混合物(まぜもの)

○忠義の犬

西洋の某國の商人、常に犬を愛して飼養しけるが、或る年の夏、かの商人愛犬を携へて河邊に散歩したり。時は夏の最中の頃とて、燒くが如き炎暑に堪へ難くやありけむ、己が着たりし上衣を脱きて、かたへの綠蔭に暫し涼をとりしが、木間をわたる清風にまどろみそめて、つひには深き睡りに陷りぬ。かくてかの商人の目覺めしは、太陽已に西に傾きて、影僅に樹頭に殘る頃ほひなりき。かれは驚きて上衣を着し、急ぎ家路につかんとせしが、如何したりけむ伴ひ來りし愛犬は、頻りにかれが足に嚙みつきて、逐へども拂へども彼處を去らしめざりし

かば、彼は恐るべき狂犬となりきと思ひ、用意のピストル取る手も見せず忽ちに打斃し、急ぎ川をうち渡りしが、はじめてかの樹蔭に懷中の財囊を置き忘れたりしを思ひ出でて驚き、彼處に歸り見れば、思ひきや、愛犬の彼れが財囊を守りて斃れ居らんとは。かれは眞におどろきぬ。さきに狂犬と思ひ誤りしは。さてはおのが財囊を忘れざらしめんとの意にてありけるかと、犬に悔い、せめて義犬の名を長へに表彰せんと、涙ながらに、厚く葬りて墓碑を建てたりとぞ。

註釋　▽飼養(飼ひ置く)　▽綠蔭(葉の繁れる木蔭)　△狂犬(發狂した犬)　▽財囊(金入れ)　▽義犬(忠義なる犬)　▽表彰(賞めて現はして人々に知らすること)　▽墓碑(墓じるし、又せきひ、せきたふ)

類題　▽義狐の話、　▽忠臣、　▽義僕、　▽節婦、

類語　▽赤心(まごころ)

○一週間の日記

四月一日(月曜)晴。　本日の修身教授は非常に有益なりき。余は一生を通じて、この訓戒を忘れざらんことを誓ふ。夜、學友二三來りて、二時間ばかり

英語を復習せり。

四月二日(火曜)晴。　朝五時半、庭の櫻咲き始めたりとて、下女に起さる。登校の途次、車夫が外人の通譯をなして、能く英語をあやつり居るを見、感心せり。午後六時山田君來る。共に出でて公園を散歩し、君と途にて別れ、本町の親戚を訪ふ。叔母より鉛筆手帳など賜はる。

四月三日(水曜)雨。　久しぶりの雨にて路惡し。學校の始業時間に後れじといそぐ。あいにく當番の日なり。午後遲くまで居殘りて掃除す。夜友人と共に國語を復習す。

四月四日(木曜)半晴。　學校の授業時間表改まる。國語の先生新任せられしためなり。

四月五日(金曜)晴。　英語の先生缺勤。その時間に體操の先生に率ゐられ、運動場にて體操をなし、あとは日露戰爭談を乞ふ。腕鳴り肉躍るの感あり き。

四月六日(土曜)晴。　午後六時「某演藝館へ、活動寫眞を見に行かずや」とさそへる友あり。快諾して行く。なか〳〵面白し。殊に水は眞物かと思はれぬ。

四月七日(日曜)雨。晴天ならば、遠足をと友に約したりしが、この雨にて殘念なり。夜遠地の友に近況を知らす。雨なほ止まず。早咲の櫻、移ろはんことを危みつゝ燈を消す。

題題　▽暑中休暇日記の一節

○衛生

世に寶多しといへども我が身に勝るべくもあらねば、まづ何よりも、身を害はずして、天壽を完うせんこと肝要なり。もし、幼年より衛生の法によりて其の身を護らば、老年に至るとも、健全なること、少壯の時に變らざるべし。衛生の方法は種々あるべけれど、其の大要を擧ぐれば、清淨なる空氣を吸ふにあり。滋養多き食物を、適度に食するにあり。身體を清潔にするにあり。適當に運動して、筋骨を使ふにあり。甚しき寒熱を避くるにあり。適當に娯樂を取りて、精神の愉快を求むるにあり。巨細に說かば枚擧に遑あらざるべし。孔子も身體髮膚を毀傷せざるが孝の始と說き、西洋の諺にも「活潑なる精神は、健全なる身體に宿る」といへり。されば衛生の法は堅く守らんことをひたすら力めざるべからず。

註釋　▽娯樂(たのしみ)　▽毀傷(こぼちそこなふ)

○軍艦を觀る

某月一日、朝六時家を出でて、新橋より汽車に乘りぬ。これ軍艦鎭遠を觀に行かんがためなり。鎭遠はさる明治二十七八年戰役に際し、支那より捕獲せる甲鐵艦なり。大森、川崎、神奈川など數ふるに、いつしか横濱に至る。暫くありて、こゝを出づれば、一二の驛を經て、早くも大船驛なり。この驛にて汽車を乘りかへ、鎌倉逗子を過ぎ、幾多の隧道を通りぬけて、ほどもなく横須賀に着きぬ。この地、圍りは、山を立て幷べて港内甚だ廣く、水深くして實に天然の良港なり。左の方のやゝ沖合に巨艦浮べり。これ鎭遠なりといふ。小舟に乘りて漕ぎ行くに、いよいよ近づけば、いよいよ大きくして、たゞ驚くばかりなり。艦に上れば、さながら大履高堂に在るが如くにして、水上とも覺えず。さて說明を聽くに、長さ五十三間餘、幅廣き處十間内外にて、甲鐵の厚さ一尺餘、噸數七千三百三十五噸。乘組人員、すべて四百人餘なりといふ。据ゑつけられたる大砲を、左右上下して、發射せん時の狀など細に示さる。右の方より、甲

板をめぐりて階を下れば、多くの室あり。艦長室、將校室、會議室など、極めて莊嚴なり。又機械室あり。悉く見及ばず。廊下に小銃を多く立て列ねたり。水兵の室を過ぐれば、讀書に耽るあり、手紙を認むるあり、針もて衣服を繕ふあり、鏡に向ひて髪を梳るあり。行くあり、歸るありて、陸上の兵營かと疑はるゝばかりなり。これより、最上部に上れば、市街造船所眼下に在り。港内の船艦幾十隻、みな太平の浪に睡れるごとし。望遠鏡を備へつけられたり。近く、遠く望むに、壯觀極りなし。更に甲板に至りて息へるに、

我軍より受けたる砲彈の痕、實に其の數五百に餘れりとき、戰爭の狀況思ひ知られたり。抑支那は世界の大國にして、東洋第一の巨艦を有せる程なれば、開戰の當時、内外人ともに勝利の歸する所を危ぶみたりしに、我が軍は連戰戰勝を以て武勇を世界に轟かし、彼は汚名を千載に留むるに至れり。丁汝昌の曾て此の艦に乘りて、我が長崎に來りしとき、夢にだも、今日あらんことをば思はざりしなるべし。嗚呼大國も賴むに足らず、兵の多きも賴むに足らざるなり。これ戰爭の上のみにあらず。精神

の修養粗かなるときは、皆かくの如しなど、思ひ出されて、時の移るを知らざりしが、案内の士官に注意せられて、陸上にもどりぬ。この夜はこの地に泊りて翌日つとめて家に歸りぬ。

類題　▽兵營參觀の記

○鐵道

鐵道は今を去ること約八十年前、英國人「ジョージ、ステブンソン」氏の創めて工夫せしものなり。蓋しこれよりさき、おなじ英人「ゼイムス、ワット」氏によりて、蒸氣機關を發明せられしかど、未だこれを陸路の旅行に應用せられざりしに、ス氏は貧困と戰ひつゝ、諸先輩の攻究せる所を折衷し、自家の考案を加へ、完全なる實用汽車の發明者たらんことを期し、經營多年、終にその目的を達し、後遂に鐵道王の名を博するに至れり。我が國にては、明治五年京濱の間に敷設せられたるものを嚆矢とす。

鐵道を敷設せんにはまづ線路の實測を要す。熟練なる技師は、みづから、山川原野を跋渉して、地勢の險夷を考へ、物貨の聚散を計りて後これを定む。既に定まれば、許多の工夫を使用して、或は榛莽を闢

きて、道を通ぜしめ、或は山嶺を横切りて、隧道をつくり、或は高きを崩し、低きを埋め、石を疊み、堤を築き、以て勾配を緩にし、かつ急に灣曲することなからしむ。かくて橋梁を架し、枕木を据ゑ、地盤を堅めて鐵條を並べ、地を選んで停車場を設け、その主要の地には、工場及び倉庫を備へて貨車客車の破損を補ひ、物貨の保存に供す。

古老の言を聞くに、二三十年以前においては、海運の業甚だ幼稚にして、舟行危險なりしかば、長門より江戸へ到らんにも、多くは陸行せり。故に一日の行程十里に超ゆといへども、なほ三旬を要し、極めて緊急なる時なりとも、十餘日を費せり。しかも其の間に、大井の流れ、函根の險、頗る行客を惱すがゆゑに、家門を辭するに當りては、老親は水盃に離愁を忍び、幼弱は衣袂を援きて別離を悲みたりとぞ。

今はすなはち如何。鐵軌東西に列り、汽笛遠近に響き、百里に餘れる東海道五十三驛も、僅々十時間にして達すべく。しかのみならず、萬鈞の重荷も、擔荷を借らず、千里の遠きも旬日を要せざれば、以て物貨の運搬を自在ならしめ、親戚故舊の急を聞かば、

たゞちに鞭ち、雲に駕し、時を移さずして訪ふことを得べく、戰時には、幾萬の軍卒、山積の軍貲も輸送し得べし。これみな鐵道の賜にして、まことに聖代の餘德なりといふべし。

・註釋　▽嚆矢(はじめ)　▽險夷(けはしきと平らか)　▽榛莽(やぶだゝみ)　▽離愁(わかれのかなしみ)　▽萬鈞(ごく重きもの)　▽擔荷(になふこと)

○鐵

鐵は、天然に產出すること極めて稀にして、多くは、他の鑛物を含有せる鑛石を、分解して製するものなり。其の質堅牢にして、容易く火に溶けず。色は元來灰白色なれども、空中に曝せば直に錆を生じて、褐色を呈すべし。故に、橋梁、鐵柵等に用ふるには、常に防腐劑を塗りてその錆を防ぐ。鐵はその効用甚だ廣く、鍋、釜、庖刀、刀劍、鍬、鋤等の日用の器具を始め、鐵道軍艦其の他諸種の機械は多く鐵にて作られ、其の實用上、効益の多大なること、枚擧に遑あらず。實に今日の文明世界は、鐵の世界なりといはむも敢て不當ならざるなり。わが國にて陸中の釜石は、主なる鐵の產地なり。また筑前八幡製鐵所は、有名

なるものにして、其の原料は清國産の鐵甚だ多し。其の他我が國の工場に用ひらるゝものは、多くは歐米各國より輸入せらるゝ鐵なりといふ。

註釋　▽堅牢（かたきこと）　▽枚擧（一々あげる）

類題　▽銅、▽石炭。

○里の小川

里の小川ほど不可思議なるものはあらじ。幅狹しといへども、廣き大空を浮べ、底淺しといへども、遊ぶ小兒の影をうつす。淋しき村の片ほとりを、流るといふほどもなき流なれば、もとより名などあるべくもなし。さばかり細き流なれども、道のまにまにうねり行きて、少しも逆ふ姿なきは、幼な子供のよき鑑ともいふべし。さゞなみといふほどもなき小波、親しきさまにうちつれて、歩み行くさま、笑ふが如く、語らふに似たり。春は堇を岸に宿し、秋はつまよぶ蛙をあはれみ、夏なればとて涸るゝことなく、冬なればとて氷りもやらず。晝となく夜となく心靜に流れて已むときなし。影見る子らは、日ごとに年ごとに變りゆけど、この靜けき流れ、いつかはかはるときやあるげにあやしきは里の小川なり。

類題　▽春の山里

○恩賜御衣の詩を敷衍せよ

仰げば、こゝにも半輪の月冴えて、庭の蓬草野菊、みな霜の光を浴ぶ。今宵はまさしく重陽の節ならずや。さるにても想ひ起すは、去年都にありて、清涼殿上の今宵の宴に侍りまつりし時の事よ。榮枯盛衰は世のならひとはいひながら、かくとは更に思はざりしを。さてもあぢ氣なきうき世なるかな。さはあれ、忘れがたきは海山にもまさる皇恩なり。かのとき、わが奉りし秋思の詩の、一方ならぬ御感にあ

づかりて、かしこくも恩賜あらせられしこの御衣は、今もかぐさゝげまつりて、日夜に聖德をしのびまゐらするなり。この御衣のあらんかぎり、我が身の生きんかぎり、豈皇恩の深きを忘れんや。

註釋　▽敷衍（意味をわかり易くのべる）　▽重陽（九月九日菊の節句）

○天

天とは、われ等の頭上を、半圓球狀をなして被覆する圓天井の如きものをいふ。科學の進歩せざる昔時にありては、一種の固形物よりなりて、星の如きは、固形物に附着せるものなりと信じたり。然れど

も、天文學の攻究せられたる現今に於ては、天は空にて、無窮無限、境界なく、際限なく、星の如きは、地球上より種々の距離に浮游せるものとの斷定を下すに至れり。天の圓天井の如く見ゆるは、畢竟肉眼にて星の距離、いづれも同一位置にあるが如く見ゆるによればなり。天文學上天體を分類して、恒星、遊星、月、彗星、流星に五分す。恒星とは、惑星遊星に對しての名目にして、太陽の如きものに名づけらる。其の數强度の望遠鏡によりて、約一億五千萬と稱せらる。遊星は略球形を有する固體の天體にて。地

球も亦其の一なり。太陽を中心として、其の周圍を回轉す。月もまた球形の固體にして、遊星と別つ點は、直接に太陽を廻らずして、遊星を廻り、遊星とともに間接に太陽を廻るにあり。彗星とは其の形變じ易き天體にして、太陽の光を反射して耀くのみならず、自體よりも光を放つもの、如し。其の數は現今までに研究せられたるもの八百ばかりなり。流星とは、太陽系中數多の小天體の浮遊せるものの、地球の大氣中に入りて、これと摩擦して熱を起し、終に燃えて流星となるなり。夜更けて四邊靜な

る時、獨、屋外に出でて天を仰げば、今更に、自然の偉大なるを想起して、自ら心躍るを禁ぜざるなり。

類題　▽山

○養蠶

養蠶は、子女を養育するに異ならず。愛に身を忘るる程ならでば、良繭を得難し。されど、愛に溺れて、不養生に身を害はしむるは、固より不可なり。夙に起き、夜半に寢ね、寢て寢ぬること能はざるは、養蠶三十日間の務なり。幼きときは、軟葉を、細く截りて嚙み易く、消化し易くすべし。しかも少かるべからず、多きに過ぐべからず。寒暑は、適度に注意せざるべからず。室内濕氣多きときは、火にて空氣を乾燥せしむべく、乾燥に過ぎたるときは、水を撒布して濕氣を取るべく、屢床をとりかへて、清潔にせざるべからず。衞生は獨り人間のみの必要物にあらざるなり。一蠶病に罹らば、直に注意し、病源を尋ねて、急速に治療法を講ぜざるべからず。傳染の憂ありと知らば、少數を捨つるとも、多數を護るの策を取るべし。凡てこれ等の辛苦、衷心の愛に出づるにあらずば、何を以てか甘んじてこれを嘗むるに堪へん

や。愛至れば心至り、心至れればまた注意も至るべし。己が苦心に育ちたる老蠶の、一朝雪の如く上簇して、やがては身を殺して美絲を留め、國家に巨萬の富を獻ずる誠忠を見ば、其の快何ぞ極りあらんや。

類釋　▽養育(養ひそだてる)　▽良繭(よきまゆ)　▽乾燥(かわかす)　▽撒布(撒きちらす)　▽清潔(きれい)　▽病源(病氣の原因)　▽治療法(なほす方法)　▽傳染(うつる)　▽上簇(あがる)

類題　▽犬、　▽馬、　▽猫、　▽鷄、　▽蜜蜂。

類語

○勇

武田信玄の村上義清を攻むるや、兩陣既に戰を交へ、矢丸雨の如し。皆竹牌を以て自ら蔽ひ、環の如く列ねて墻となせり。俄にして信玄その陣を分ちて兩隊となさんと欲し。三井某米田某をして、遙に令を別將飫富板垣の二氏に傳へしむ。二氏命をうけて出づ。米田曰く、牌外は路危し、牌内より行かんと。三井曰く、勇者は矢丸を恐れず。われは牌外より行かんと。出づれば、銃丸亂下し危きこと甚だし。僅かに百死を免れて達することを得たり、その面色灰

の如く、口噤して言ふこと能はず。米田既に令を二將に傳へ、笑つて三井に謂ひて曰く、歸路は牌外よりせんと。三井曰く、一たび之を悔ひぬ。豈再びすべけんや。米田曰く、前に子と俱にせざりしは、特に主命の達せざらんことを恐れてのみ。今使事既に畢れり。何を畏れてか牌外よりせざらんと。既に歸りて復命し、意氣從容として、辭令故の如し。三井大に慚服せり。

それ使命は重事なり。尋常の細事にも慎まざるべからず。況んや軍令をや。米田の前に畏れしは義なり。後に畏れざりしは勇なり。勇あり義あり、以て使事を完うせしは賞すべきかな。

註釋　▽竹牌(竹の垣根)　▽主命(主人の命令)　▽復命(命令された事の返事)　▽從容(落付きたるをいふ)　▽辭令(ことば)　▽慚服(恥ぢて感服する)　▽軍令(戰の命令)

類題

類語

○氷

水を冷却せしむれば、凝固して氷となる。されば水と氷とは、唯溫度の差によりて、形をかへたるもの

のみ。我が國においては、信濃國諏訪の湖水は。毎年冬より春にかけて一面に凍り、人其の上を往來し、近來は又遠近の人集りて、氷滑(こほりすべり)の技を競ふといふ。亞米利加の北方の大湖は、冬期馬車にて湖上を往來すと聞きしが、さもありぬべし。寒地の海面には、氷山と名づくるものありて、潮流に漂ひ航海の船舶これに衝突して、破碎することあり。かくの如く、水も一たび凍りては、恐るべき勢力を有すれども、又効用も夥しきものあり。人力にては、破碎し難き岩石をも、容易に碎き、害蟲を凍死せしむるが故に、作物の被害を減じ、其の他夏季の飲料として、熱病患者の治療品として、缺くべからざるものなり。

註釋　▽冷却(れいきやく)(ひやすこと)　▽凝固(ぎようこ)(かたまること)　▽衝突(しやうとつ)(つきあたること)　▽破碎(はさい)(くだくこと)　▽被害(ひがい)(害をかうむること)　▽害蟲(がいちう)(害をする蟲類)

類題

類語

○農業

わが國は、古來、瑞穗の國と唱へられ、米麥等の栽培つとに開けたり。これ則ち、溫和なる氣候と。肥沃な

る地味とが極めて農事を行ふに適したる故なるべし。されど世界各國の狀況を見るに、わが國の農業は、いまだ改良すべき處多き而已ならず、開墾すべき荒地も少なからざるを知る。則ち西洋諸國の耕作地は、その國の總面積の、二割乃至五割を占むるに比し、わが國は僅かに一割五分に過ぎず。加之、彼れは研究の結果になれる學理を應用して、常にその栽培法を改良し、收穫を增加せんと勉むるに、わが國の農夫は、なほ舊來の栽培法を固守して顧みざる如き傾向あり。これらは一日も早く改めざ

るべからずと信ず。なほ世には、農業を以て賤しき業の如く思へる者あれど、決して然らず。農業は生活に必要なる食料を栽培するものなれば、職業中、尤も有益にして、尤も貴重なるものなり。

註釋　▽栽培(植ゑること)　▽肥沃(土地のよいこと)　▽狀況(ありさま)　▽開墾(新しく土地を耕すこと)　▽舊來(昔からと云ふこと)　▽固守(かたく守る事)　▽傾向(かたぶき)　▽生活(暮すこと)　▽貴重(たつとき事を云ふ)

類題　▽工業、▽商業。

類語

○朋友

人には朋友なかるべからず。人にして朋友なきときは、社會に立ちて寂寞の感すくなからざるべし。されど朋友はよくよく選擇して、善良なる者を取らざるべからず。諺に、朱に交れば赤くなると謂へり。若し凶惡なる人を朋とする時は如何に注意するも、知らず〳〵其の氣風に染りて、遂には自分も凶惡なる人となるに至るべし。愼まざるべからず。

註釋　▽社會(世間)　▽寂寞(さびしき事)　▽選擇(えらぶ事)　▽善良(よき事)　▽凶惡(あしき事)　▽氣風(性質)

類題　▽兄弟、　▽姉妹、

類語

○三月の雪

花は春さきてこそ見るかひもあれ。地も凍てし冬などに咲きたらんは、をかしからざるべし。これと同じく、雪は冬降りてこそ、人も我も飽かず眺めなむ。時候はづれに降りたらんは異樣なり。春とは云へど、きさらぎの頃はつかに淡雪の催したるなんと、亦得ならぬ趣あるめれど、三月に入りての雪は、晦日に月の出づるが如く、たゞ、あなやと驚き、めづ

らしと見るのみにて、決して愛でたきものにはあらず。殊に咲き揃ひたる梅の枝などに、たわゝに積みたるを見れば、心なしとは云へ、憎くさげなる風情なり。總じて、いかなるものも、例に違ひたるは、見る目いぶせきものなり。

註釋 ▽凍てし(氷れる事) ▽異樣(樣子が違ふ事) ▽きさらぎ(二月) ▽はつか(僅かに同じ) ▽淡雪(春ふる雪)

類題 ▽滿月の夜の雨 ▽冬の日雷鳴を聞く

類語 ▽滿月(十五夜なり) ▽雷鳴(雷のなる事)

○梅

梅は二月、春とは云へど、未だ雪ふり霜おく頃に百花に先立ちて開くを以て、昔より殊のほか持て囃されたり。まことに寒風にも萎まず。凛然として、芳しき薫りを放ちつゝ、咲き綻びたる樣、目もたゆげにて、いたいけにも又心地よきものなり。されば古への菅丞相も、こち吹かば香ひおこせよ梅の花、主なしとて春な忘れそ、とわかれを惜み給ひしも、げにことわりとおもほえて、哀れ深き事どもなり。またこの花は寒氣にめげず開くを以て昔より、貞操の固きに比せられ、節婦にたとへらるゝ等、まこと

にめでたき花なり。

註釋　▽百花(多くの花)　▽目もたゆげ(見て居ても飽かぬ事)　▽いたいけ(愛らしきこと)　▽菅丞相(菅原道眞公)　▽こち(東より吹く風、東風)　▽ことわり(もつともと云ふ事)　▽貞操(みさを)　▽節婦(行爲の正しき婦人)　▽凜然(きりゝとしたこと)

類題　▽櫻、▽牡丹。▽菊、

類語

○衣服

衣服は身分相應なるがよし。高貴なる人の、粗衣つけたるはわざとらしくして、見る目よろしからず。

又、さもなき人のきらびやかなる衣著たるも、賤しげなり。學生は學生らしく、木綿にてもあれ、絹にてもあれ、ありあはせたるを、垢つかぬ程に著なしたるが、家庭の敎、又、當人の心掛の、奥ゆかしさも忍ばれて、心よき感を與ふるものなり。總じて衣服には限らず。身分相應と云ふことは、味ふべき金言になむ。

註釋　▽身分相應(自分の位置に丁度合ふ事)　▽高貴(身分の高いこと)　▽粗衣(見すぼらしき衣服)　▽見る目(見たところ)　▽さもなき人(高貴ならざる人)　▽金言(正しい意味のある言

葉）

類題　▽住居、▽食物、

類語

○口語體を普通文に改むる例

其一

荒壁の破れ目を洩れる風は、ともすると、消え入り相になる豆洋燈の灯を、一層危くするのである。私は火の氣のない、小さい火鉢に身をよせて、物凄い風のうなりを聞いてゐた。

一しきり激しい風が、横さまに板戸を叩いて通つた後で、微に夜警の拍子木の音が聞えて來る。あゝお父さんか。寒いだらう、あゝ淋しい音だ。

風はまた一しきり吹いて來た。父は横町へ曲られたと見える。拍子木の音は途絶えた。

○

荒壁の破目を洩る風は、ともすれば消えなむとする豆らんぷの灯を、愈が上に危からしむるなり。我は火の氣なき小火鉢に身を寄せて、物すごき風のうなりを聞きて居たりき。

一しきり、激しき風の、横さまに板戸を叩きて通り

し後、かすかに夜警の拍子木の音ぞ聞え來る。あはれ、その拍子木打こそ我が父なれ。寒かるべし。あはれ寂しき音かな。

風はまた、一しきり吹きて來ぬ。父は今しも横町へ曲られしと覺し。拍子木の音は遂に途絶えぬ。

○渡

秋晴の空は一片の浮雲もない。日は容赦なく照りつけて、胸の方が薄ら寒いのに、背中は燒ける樣に暑くなつてゐる。私はがた〳〵足踏し乍ら、愚圖愚圖進む船を待つて居た。向岸にも三四人立ち初めた。

一艘しかない渡船は、まだ河の中央を漕いでゐる。工場の煙突から、むく〳〵と煙が出てゐる。低い家、新しい電信柱、粗な木立、それが向岸にある凡てのものだ。

櫓の音がギーギーと耳に響く。私は船の近づいたのを知つて、河岸から、下の繫いだ船に降りた。

船が著くと。船頭の怒鳴るのもかまはず、客は我先きにと乘り移る。船が傾いて、私の下駄は水をかぶつて足が濡れた。

船は空にならない内に、新しい客を載せて岸を離れた褲をした船頭は、先を見つめて櫓を動かす。婆さんは、恐しさうに船縁に摑つて蹲踞んで居る。小僧は豆ネジを嚙り乍ら、向岸を眺めてゐる。

新造の船は、白木の香が高くする。板底がないので、船腹に當たる水音が足に響いて氣味が悪い。

向岸には早や七八人客が待つて居る。

註釋　▽秋晴(秋の日、空が澄んで、雲の影なく晴れ渡つて居る事)　▽新造の船(新しく造つた船)

類題　▽停車場。

類語　▽雪晴(雪が止んだ後、空が晴れた景色)

○汀

落暉の餘光が、幾萬條の金筋を一時に射放つたかのやうに、夕燒雲の間から空ざまに輝いて居る。それが海上に落ちて碎けて、目も眩むばかり、燦然として、金波を躍らせ銀蛇を奔らせて居る。

汀には貝を拾ふのであらう。五つ六つの愛らしい。海軍服の小兒が、波の寄せ來る度に、あわてゝ、うばらしい人の許に逃げて行く。其の樣子が餘程面白い。

何處の金佛樣が歩いて來たかと思ふ計り眞黑なのが二三人、地引網を引いてゐる方へ、一散に走つて行つた。

後からは、魚を買つて來たのであらう。筒袖の、よごれきつた、つんつるてんの着物に、ぐちや〳〵になつたひやめし草履をつかけて、魚籠を背負うた婆さん連が、三々五々町の方へ行つた。

島の隱から、此方に向つて、勢よく漕いで來るのは、正しく漁船の歸りである。舳には大漁の旗が心地宜げに、ひらり〳〵と靡いてゐる。船には紅褌むかう鉢巻の水手舵取、うたふ款乃の節面白く、白波を立たせて漕ぎ來る樣は、何んとなく勇ましい。

註釋 ▽金波銀蛇(波の光るさまを云ふ) ▽ひやめし草履(やすい草履の名) ▽空ざま(空にむかふことのけざま)

類題 ▽港 ▽荒磯

類語 ▽爛金の色(金をとらかした色) ▽爛銅(銅をとらかす)

○釣魚

夕日がたゆたふて、西の空を美しく彩つてゐる時、涼しい風が、さつと竹の葉を搖すつて吹いて來る。合歡の花がそよ〳〵と、薄絹のリボンの樣に動く。

川の水は物凄く青ぎりて、兩岸の青葉は綠を溶かした樣である。

橋の上から、頰かむりした健ちやんが、

「釣れるかい。」と、聲をかける。

「うむ。釣れるとも。」と至つて無愛想な返事をして、自分は一心に浮標を見つめて居る。向岸近く小鮒が口を揃へて、ぱくぱく浮いてゐる。浮標は一度も動かない。餘りの懊惱しさに釣竿を動かして、浮標を水面で跳らせる。今迄一つのさわぎもなかつた小川は、一面に波紋が起つて、寫つて居た綠の蔭が、ゆらゆらと自分の足元まで來る。すると大きな蛙が浮を目がけて進んで來た。自分は釣竿の先で蛙の頭を叩いて遣る。ぴしつと潛る。拍子ぬけがして、絲を揚げて蚯蚓を差し更へて、再び水に入れて見たが浮標は矢張り動かない。もう蛙も來ては吳れない。場所を變へて見たが駄目だ。

今日に限り、一尾も釣れない不思議さに忌々しくなつて、川の中へ大きな土塊を拋げ込むで、畫顏の咲いた細道を家へと辿つたのである。

註釋　▽たゆたゝ(ゆたゝゆれる)

○姉妹

今宵も、慈愛ふかい神様のお護のもとに、可愛い妹の緑ちやんと、平和なる安息に就くのである。と想ふと、もう〳〵嬉しくつて、私の心は何とも言へぬ匂やかな、懐かしい感想に充たされるのである。就寝のまへには、二人はいつも讃美歌をうたひ、心静かに、お祈をさゝげて、神様のお惠を感謝するのである。今宵も緑ちやんは、讃美歌の大きな譜本を両手にかゝへ、四百二十五番を歌ひはじめた。その可愛い聲、あどけない姿の、さながら愛の化身

かと想はるゝ様子、見るから堪へがたさ懐かしさが込あげて、私は幾度も林檎のやうな頬にキッスをした。この波風荒き世に、両親を失つて、たゞ獨纎弱い姉を生命とたのむ妹の心情は、實に斷腸の極みである。

星光あざやかに窓を照す時。妹の愛らしい寝顔を見て、想はず「神よ我が最愛なる妹を憐みたまへ」と涙ながらに祈つたこともたびたびであつた。

私は、妹とともに草花を摘んで、まゝごとをし、お伽噺をかたり、また、父母にかはつて、聖き神様の教訓

を敎へ、髮を結び、ほころびを縫うてやるのを樂みとしてゐる。あゝ二人は、世に最も憐れな孤子の境遇にあるが、宏大な神の祝福によつて、無限の感謝と希望とをもつて、險しい人の世の旅路を樂しく辿つてゐる。

註釋　▽安息(やすむ事、ねる事)　▽就寢(寢ること)　▽化身(うまれかはり)　▽斷腸(かなしい事)　▽祝福(みめぐみ)

類題　▽運命。

類語

○月

稍々南に傾いた月が、中空に澄んで居る。星は見えない。綿をちぎつたやうな雲が、一い、二う、三つまでも浮んで居る。空の色が、次第に蒼くなる樣に思はれる。

私は今、緣側で青白い月光を浴びて居る。

五位鷺が啼いて過ぎる。南から北へ。

下駄をつつかけて、庭に立つて見る。姿は見えぬが、その淋しい聲は、北の空で聞えた。私の影は、くつきりと、芝生に印して動かぬ。浮き出たやうな築波山は、甚だ壯嚴である。

村の童どもが、盆唄を歌ふのが聞える。樽を叩く音もする。音頭とる子は誰であらう。なか〳〵に上手にやると思ふ。北の村でもやつて居るらしい。まだ今日は舊暦十日である。

スキツチヨンが嘶き出した。細い力強い聲を、ゆるやかに引伸した鹽梅は、何と形容したらいゝだらう。この聲は、懷しい月の色に醉ふて、あぐる讃美の聲ではあるまいか。

また樽を叩く音が聞えた。

ぱつと月を見上げた。赤味のある月は、以前の如く無心に輝いて居る。

註釋　▽壯嚴（いかめしいこと）　▽讃美の聲（あこがれ歌ふ聲）　▽無心（心なくと云ふ意）

類題　▽星、▽七夕、

類語

○海岸

岩の上に腰をかけた。見る〳〵潮が滿ちて來るので頭だけ顯はして居た小高い岩も、次第に沈んで仕舞つた。滿々たる水面は拭つたやう、彼處に此處に、大小の黑い岩が、相集り相背いて浮いて居る。其

の間を縫ひながら、泡の群がいくつとなく、沖の方へ漂うて行く。

時々鰯が飛び上るが、小石でも投込む如く落ちるので其の度毎に靜かな水面にゆら〳〵と波紋が起る。

沖の方から、寄せて來る平かな波が、岩に迫ると急にそゝり上つて、高い岩は肩から浴び、低い岩は沈んでしまふ。布を裂いたかのやうに、岩の肩から白い水が流れ下ると、落ちた水面が白く躍つて、泡が湧き沫が舞ひ上がる。低い岩が涼しさうに頭を現はし、鳴きながら飛び上つた水鳥が數羽、前後して左の岩に移つた。丁度其の岩の向に一寸許の白帆が見える。何時しか水は、ぶらさがつた足さきをなめて居た。

藍色の空も漸々とうすれて、今は紅色に、それも亦紫に變らうとして居る、時はもう六時も過ぎたのであらう。

日は既に、半ば地平線に入つて、僅に光線だけを見せて居る。で、海水には、雲の彩紋と、餘光とを寫して、そして、それが波浪に搖られて、きらめいてゐる。

類題　▽海。

○下宿屋

私が今度移つた下宿屋は、神田猿樂町の裏通りで、可成大きな家である。

室は二階の眞中程に位した四疊半で、恰度表通りの時計屋の庭と、小學校の運動場とを、見下してゐる。今朝窓の障子をあけた時、時計屋の女中が手拭を被つて縁側を掃除してゐたのと、小學校の運動場で若い女の先生が小さい男の子に、遊戯を敎へて居たのがよく見えた。

室の裝飾は何んにもない。建具は古いが、小じんまりと出來てゐる。併し柱と壁の間、敷居と障子の間には、必ず二分或は三分許り透間があるから、冬向にはちと涼しすぎるかと思はれる。

押入と丼んで、床とも袋棚とも見えるものが、つけてあるが、其上に、手垢のついた字書や、汚れたノートや敎科書などを善き程に丼べた。其の傍に緣のこげた、火鉢と、インキと小刀で名譽の負傷を被つてゐる机とを構へた。

其處が窓下になるので、机の上にも古新聞や。雜誌

や、旅行案内を重ねて置いた。實はまだ、本箱がない。今夜五十の縁日へ行つて買つて來やうと思つてゐるのだ。

類題　▽寄宿舍。

○春の日

ペンを抛げて座敷の障子を開け放つた。暖い春の日は、ぱかぱかと縁側を照してゐる。弟は敷居の所に青寫眞を寫してゐる。暫くして抱き隱す樣に走つて行つて、紙を手水鉢で洗ふ。天井を見ると、其の反射の圓い影が、きら〳〵搖いて居る。妹は人形に服を着せたり、脱せたりして居る。その傍に、小猫がうづくまつて睡つて居る。

祖母さんは、眼鏡をかけて針仕事をして居る。

桃が、六七分通綻びて、ぬるく、やはらかな午の風に、奇しき香を放つ春の驕の匂ではなからうか。

庭の片隅にある僅の畠には、菜の若芽が薄綠に打烟るばかり。私は、ねむくなつた。

突然「コラッ」と弟が怒鳴つたので、吃驚してみると、猫が箱の中の藥紙を出して居るのだ。

其の聲に祖母さんは、眼鏡越に何んだといふ風に、

此方を眺めて居る。

夢のやうに雲雀が啼く。何處からか太鼓がでんでんと響いてくる。何んだか懶げな日だ。

類題　▽春の野邊

○夕暮

山家の夕ぐれだ。

空は、雲も靄も、空氣も、光も、一つになつてぼつとしてゐる。今し方、山に落ちた光が、まだ高い空には照つてゐると見えて、薄い黄地がすいて見える。見てゐると、雲も動く。靄も動く。空氣も、光もみんな動く。

動いてゐる〳〵と渦をまいてゐる樣だ。そして、暗い光の洸濕といふ樣なものが、重苦しく垂れ下つてくる。それが次第に、丘や、木立や、人家を呑み初める。

風が吹く度に黍の穗は空でゆら〳〵となる。下の枯葉はお互に擦合つて、かさ〳〵、かさ〳〵と妙なはかない聲をしてさゝやく。

すると、遠い暗い方から、遠い暗い方へ強い風が吹いた。夕暗は重く濕んで、一寸も動かない。が、凋落に迫つた四圍の草木の影は、一樣に搖れた。丁度、老い

さらぼつた一群が、手も足も一緒にして宙にもがいて、泣き叫ぶかのやうな形をして。風がをさまるとまた、例の穂の、深い頷き、葉のさゝやきが黄昏の空氣を渡る。

類題　▽朝、▽あけぼの

○小川

小川のほとりに立つた。

水は清くすんで居る。小魚が四五匹さもうれしさうに、往つたり來たりして居る。その早いこと、まるで活動寫眞を見る樣であつた。底は小石だ。砂もあ

れば、陶器の破片もある。魚は巧くに石の下をくゞつたり、出たりして居る。こんなに早いのだもの、小さい時魚取りに來て取れなかつたのも無理はないと思つた。すると、黑い濁つた水が流れてくる。藁もまじつてゐた。魚の影は一つも見えぬ。不思議に思つて上を見ると、四五間先に、女が來て大根を洗つて居た。何時の間に來たのか、私は少しも知らなかつた。洗つた大根は枯葉の上にほしてある。

ジヨン〳〵〳〵と、いふ聲が聞えたので見ると、犬が小川の橋の上を、自轉車が通つたので、ワン〳〵

吠えながら、十間ばかりも追つて行くが。つまらないと云つた風に歸つて來ると、向うの岸に、子供が立つてゐた。

大根を洗つてゐた女は何時の間にか行つて了つた。

小川の水は清く澄んで、相ひ變らず、魚が往つたり來たりしてゐる。

類題　▽吉池、▽谷川。

○林

私は靜かに林の中を歩行いてゐる。

午後の和かな太陽の光は、木の間を通して、帶の樣に幽邃な林の奥まで這入り込む。林の中は思つたより明るい。

大きい杉や松が、少しの身動もしないで、しんとして立つて居る。遠くから見ると、大きいのばかり見えるが、來て見ると大きいのに護られて、小さい若いのが、上を仰いで頭をもたげて居る。栗や、楢や、榛の木も交つてゐる。生えてる木は、一本々々にすくすくと立ち并びずつと奥の方は、重なり合つて、向ふが見えぬ。

時々、かん〳〵と、木を伐る音が聞える。香んばしい、木屑のとぶのも木の間を洩れてちら〳〵見える。木を伐る音が止んで、邊が靜かになつたかと思ふと、寺の鐘が霞を破つてゆるやかに響く。その鐘の音は、みんなこの林の中に吸はれ、てしまふのではないかと、思ふ程よく聞える。前の榛の木の小枝に、何處からか小鳥が二羽來て止つた。一羽は默つて首をすくめて居る。他の一羽は機嫌でも取る樣に囀りながら、其の邊りをとび廻つて居る。暫くすると、キ、、と鳴いて、二羽とも飛び立つた。

ちつと行のを見つめてゐると、蒼い空をとぶ内は、だん〳〵小さくなつて、それでも見えて居たが、遙か向の山の端にかゝると、見えなくなつてしまつた。

林はひつそり靜かになつた。私はなほ靜かに歩行んでゐる。一種嚴肅な、しかもやはらかな、味のある沈默が保たれて、靜寂の匂と云つたやうなものが、犇々と私の小さい心に迫つて來る。足元からは、若い人をそゝるやうな、土の匂が漂つて來る。私はその靜寂の匂に醉つて、新しい生命に觸るゝ嬉しき

寂寥を感じた。

ふと道に出て、林の家のあるのを見た。そして此の寂しい多趣味な林中生活を、如何に羨ましく思つたであらう。暖い日光は、林をちら〳〵と洩れ、林、林の家、道に散らばつた古草鞋などの凡べての部分を照してゐる。家の前には桶、柄杓、薪炭などがちらもなく并べられ、竈の側に、白い猫の眠つてゐるのまでが見え透けゐる。

人聲更にせぬ靜寂を、白い煙がゆら〳〵屋根にはひ、林をめぐり、そして藍を流した空に舞ひ昇る。

うねつた路に沿つて進むと、パッと明るくなつて林は盡きた。

註釋　▽幽邃（しづかなる事）　▽嚴肅（おごそかなること）　▽沈默（無言と云ふに同じ）　▽靜寂（しづかなること）　▽寂寥（さびしいこと）　▽多趣味（おもむきの多いこと）

類題　▽森、　▽山。

類語

◎寺

鴉が山門の銅屋根に三羽下りた。

私は例の如く、靈妙寺の境内を踏んでみた。庭は可